

駆動装甲 フォルテア

小説：端音 乱希
挿絵：青色3号



目次

目次・登場人物紹介	P2
本編	P3～P67
あとがき・奥付	P68

登場人物紹介

●柳瀬 凛子（やなせ りんこ）

明るく元気な女子校生。普通の生活を送っていたが、宇宙から来た破壊兵器オムニサイドの襲撃を受け、戦闘フレーム『フォルデア』を身に纏って戦うことになってしまう。

●リフィレ

疑似人格を搭載したフォルデアのナビゲーションプログラム。武器の転送などを行い、凛子をサポートする。

●オムニサイド

文明を破壊することを目的とした兵器。地上の資源を吸収して増殖を繰り返す。円柱状の飛行物体を飛ばして、人類に攻撃を行う。



駆動装甲フォルデア

1

私、柳瀬凜子に彼氏ができてから、今日で2週間になる。

相手はサッカー部のエース、神田浩介くん。告白したのは私からだ。陸上部である私が、校庭で彼を目で追い始めてから、半年後。意を決して想いを伝えると、彼は驚きながらも恋人同士となることを承諾してくれた。人生で一番幸せな瞬間だった。

それ以来、こうやって毎日、互いの部活動が終わってから、並んで帰宅している。彼の家と私の家は、学校から見てだいぶ方角が違うが、彼は私の家の近くまで一緒に歩いてくれる。

「それでね、先生が次の大会、ハードルにも出てみないかって」

「飛び越えるやつか？ いいじゃない、面白そうで」

「ええー。でも、これで5種目だよ。いくらうちの部、人数少ないからって、出させすぎ」

最初はぎこちなかった私たちの会話も、徐々に自然なものになってきている。

とは言っても、会話の内容は友達同士のそれであり、恋人同士が作り出すロマンチックな雰囲気にはまだ至っていない。付き合い始めてそこそこ時間が経ったわけだし、いつまでも友達同士のような関係ではいけない気がするが、何しろ異性と付き合うのは初めてなので、どうしたら恋人同士の雰囲気を作り出せるのか、見当もつかなかった。

せめて、手くらい繋いで下校できるようにしたいのだが、今のところ、それすらハードルが高い。キスや、そのもっと先のことに興味はあるのに、そこまで辿り着ける予感がしない。

（まだ、焦らなくていいよね……）

今はまだ、友好な関係を構築することが重要だとも思う。こちらから告白した手前、彼の気持ちを最優先したい。下手なことをして、今の関係を壊してしまうことが、何よりも怖かった。もっと信頼関係を築けば、自然により深い関係になれるはず。そう信じることにする。

「あの発掘作業、いつになったら終わるんだろうな」

不意に、浩介くんが正面の小山を見上げながら呟いた。

「ああ、あれね……」

私も視線を合わせる。

浩介くんが言っているのは、街の中心にある小山の中腹辺りの、白いビルシートで覆われている箇所のことだ。

ニュースの情報になるが、あそこには貴重な遺跡があって、専門家たちが日々発掘作業を行っているらしい。ここからかなり距離があるのに、白い部分がはっきり見えるので、あのシートはかなり広範囲を囲んでいるということになる。

「確かに、ずっとやってるよね。もう1年くらいじゃないかなあ」

よく見ると、白いシートの中から、クレーン車のクレーンが突き出していた。あんなものを持ち込むくらいだから、発掘は大規模なものだろう。

「何が掘れるんだろうな」

「さあ……そこまでは知らない」

その貴重な遺跡とやらが、いつの時代のものなのか、具体的に何が見つかっているのか、そういった情報は耳に入ってこない。スマホで検索してみれば、現時点での成果が分かるのかもしれないけれど、わざわざそのようなことはしてこなかった。

せっかくだし、これを機に調べようかな、などと思っていると、私たちは到着してしまった。住宅街のある十字路。浩介くんとは、毎日ここで分かれることにしている。私の家まではもう少し距離があるが、家の前まで送ってもらうのは、近所の人の目が恥ずかしいので、少し手前までという取り決めにしていた。

家族に見つかるのも望ましくない。彼氏ができたことを、まだ両親に話していないのだ。

「それじゃあ、また明日」

十字路の中央で、浩介くんがさわやかに手を挙げる。格好いい仕草なのだが、もう少し私との別れを惜しんでくれてもいいんじゃないか。

「うん、また明日」

だが、ここで彼を引きとめては迷惑だろう。既に日は沈みかけている。ただでさえ遠回りをしてもらっているのだ。これ以上帰宅時間を遅らせては申し訳ない。

どうして、幸せな時間はすぐに過ぎてしまうのだろうか。

「また、明日……」

私は浩介くんの背中に向かってそう呟くと、逆の方向に歩き始めた。

発掘現場のことは、意識の外へ消えていた。

2

「んっ、く……んっ……！」

私の身体が、ベッドの上でびくんと震えた。

膣壁が私の指を包んで、何回か痙攣する……絶頂に達したのだ。

「っ、ん……はあ、うあ……浩介、くん……」

夜間に包まれた自室。布団の中でパジャマを脱ぎ捨てた私は、ショーツ1枚という姿で自慰にふけていた。

想うのは、恋人である浩介くんのことだ。彼と身体を重ねる行為を想像して、私は指を動かす。1度の絶頂だけでは、私の指は止まらない。

「あう、くうう……んあっ、あっ……くうう……！」

激しく突き入れられる彼の男根の感触を想像し、私は吐息をもらし、肩を揺らす。ベッドの上で身体を横にして、膝を抱えながら刺激を求めた。

浩介くんとは手を繋いだこともないので、当然エッチなんてしたことがない。彼が初めての恋人であり、これまで男性と触れあった経験はなかった。私が年相応の肉体を持て余した時は、こうやって自分の手で鎮める他に手段を知らない。

片手で膣内をかき回しながら、もう片方の手で乳首を弄る。さほど大きくない私の胸は、乳房を揉むよりも乳首を刺激した方が快感を得ることができた。本当は両方の胸を同時に触りたい。腕が3本あればいいのに、と思う。

「つううう、んあああああっ……！ あっ……ああっ……ん、っああああ……！」

私に押し掛かる浩介くんは、その逞しい腕で私を強く抱きしめる。私の身体が壊れてしまうくらいに、強く、強く……そのイメージが、温かな幸福感となって、私を満たした。

膣内から愛液が溢れ、私の指に絡みつく。ちゅく、ちゅく、という水音が耳に届き、さらに私の性感を高めていく。

私の呼吸が荒くなる。想像の中の浩介くんも、呼吸を荒げ、感じてくれていた。私たちは一緒に、昇りつめていく。そして、

「あっ、あ……ああ、んっ、あっあっあっあっ……んああ——っ……！」

2度目のオーガズム。と同時に、私の身体はがっくりと弛緩した。丸めた膝が、びくびくと震えている。

（気持ち、よかった……）

私はこの幸福感に包まれたまま、眠りにつくのが好きだった。身体の昂りが急速に引くと同時に、意識も薄れていく。

（いつか実際に、浩介くんと、するのかな……）

今はまだ、怖い。だがいつか、浩介くんと真の信頼関係を築いて、その時に彼が求めて来たら、応えてあげたいと思う。

（たぶん、まだ、ずっと、先、よね……）

2人の未来を思い浮かべながら、私は静かに目を閉じた。

3

私の毎朝の行動は、パターン化されている。

目覚まし時計のアラームによって叩き起こされた私は、お返しとばかりに時計を叩いて音を止め、もそもそとベッドから這い出した。

本当は授業に間に合うギリギリまで寝ていたのだが、浩介くんの朝の待ち合わせの時間までに、身だしなみを整えなければならない。恋する乙女は何かと準備に時間がかかるのである。

2階にある自室から階下に降り、ほとんど眠ったままシャワーを浴びる。温かなお湯に身を包んでいると、徐々に意識が覚醒してくるのが分かる。

シャワーを終えた後は、体を拭き、ドライヤーで髪を乾かす。さっぱりした状態で、用意していた衣服を手取った。白いショーツを身に付け、紺のハイソックスを履く。

「ふああ……」

あくびをしながら自室に戻ると、私は姿見の前に立った。ヘアゴムを取り出し、髪をツータールに結っていく。

胸が隠れるくらいまで伸びたロングヘア。光を当てると茶色く見えるが、これが地毛の色である。

結う手間を考えるとボニータールの方が比較的楽で、これまではそうすることが多かったが、前に気まぐれでツータールにした時に、浩介くんにかわいいと褒められて以来、ずっとツータールを続けていた。我ながら単純である。

（胸、もっと大きい方が、浩介くん、好きだよね……）

わずかな胸部のふくらみを鏡越しに見つめながら、そんなことを考えた。自分の身体に、女らしさが欠けているのではないかという不安は、常に持っている。高い身長、筋肉質な体、小さい胸……女としての魅力がなければ、いつか浩介くんに愛想を尽かされてしまうかもしれない。そう考えるとすごく怖い。

「よし……」

ツインタールが完成した。

本来ならばこの後、制服に袖を通すのだが……そろそろ背後にある物体に目を向けなければならない。

「んで、これは何よ……」

それは、1メートル四方はあろうかという箱状の物体だった。部屋の主である私に見覚えのない物が、目の前に存在している。

いや、本当に何なのだ、これは。季節外れのクリスマスプレゼントにしては大きすぎるし、見た目からして床が抜けるんじゃないかと思えるほど重量感がある。そもそもこの大きさだと、部屋の扉を通れないはずだ。どうやってここに入ってきたというのだ。

本当は、起きてすぐ、シャワーに向かう際にも視界に入っていたのだが、寝ぼけているが故に見える幻かもしれないという一縷の望みに賭けて、気付かないフリをしていたのだった。

だが、シャワーを浴びて目を覚ました状態でも見えるということは、幻ではないということになる。いい加減に正体を突き止めなければ。これを放置して、呑気に学校へ行くというのは、なかなか難しそうである。

「なんか、ゴテゴテしてる」

私は、箱の表面をじっくりと観察した。カラーは青と白。見た目は金属質。表面は平坦ではなく、でこぼこしている。ところどころに継ぎ目のような線があることから、1つの物体ではなく、複数の物体の集合体なのかもしれない。

観察して気付いたことはそれくらいで、これが何なのか、一体どこから来たのか、といった肝心なことは、何も分からない。

（爆発とか、しないわよね……？）

私は恐る恐る、その物体に手を乗せた。それだけでは何も起こらないと
思っていたのに、

『認証。柳瀬凜子』

「……！」

ピピッ、という電子音が鳴り、物体が音声を発した。

（何……？ 今、私の名前を言った……？）

身構える私。すると突然、箱の継ぎ目が光ったかと思うと、箱がバラバラになり、10個以上の細かなパーツに分解した。そしてそのパーツが、なんと私に向かって飛びかかってきたではないか。

「えっ、ちよっ、何、これっ……！」

逃げる余裕などなかった。至近距離から飛来した金属の塊が、私の体にぶつかる。明らかに怪我をする勢いだった。しかし、金属の塊は、ガシャンと変形しながら、私の体に付着、いや、装着されていた。

「うえっ……うひっ……!? うええっ……！」

両手、両足、両肩、胸部、腰部、そして最後に、頭。

目の前にあったはずの金属の箱は消えうせ、そのすべてが、私の体に装着されている。私は姿見に向かって振り返った。鏡に映っていたのは、私だったのだが、これは――

「――何？」

全身が、ロボットみたいになっていた。全身に、金属のパーツ、というか、装甲みたいなものが貼りついて、やたら強そうに見える。

足の先は靴を履いたように覆われてしまったが、手の方は指の1本1本が個別に金属で覆われており、抵抗なく自由に動かすことができた。胸部の装甲板は小さな胸を完全に包み隠し、腰回りのパーツからはスカートのような布が垂れ下がっていた。頭部のヘッドギアみたいなパーツが、私の額をがっちりガードしている。

その他にも、肩やら腰やらに、ゴテゴテしたものが取り付けられていた。逆に金属に覆われていない箇所の方が少なく、二の腕、太もも、そして顔と首くらいしか露出していない。

「もう、どうなってるのよう……」

私は泣きそうな声になりながら、金属で覆われた手で、額の装甲を掴んだ。装甲は接着剤でくっつけたかのごとく、がっちりと頭に密着しており、剥がれそうにない。

そもそも、あれだけ体積のあった金属が体にくっついたというのに、まるで重さを感じなかった。元々自分の体の一部であったかのように、金属の装甲は私にフィットしている。

（わけが、わからない……これ、何なの……？）

こうしている間にも、浩介くんと待ち合わせの時刻は近付いている。まさかこのままの姿で外出するわけにはいかない。なんとかして、外さなければならぬのに、外し方が分からない。まずい、本当に泣きそうになってきた。

『装着完了』

その時、再び音声が聞こえた。機械音だが女性的な声質。自分の体の中から聞こえたような感覚だったが、この金属が喋っているのだろうか。

「ねえ、今喋ったのは誰？」

『私は“リフィレ”です。omnicide-paster OMMframe “Omnia munda mundis” “First prototype” “フォルデア” “ナジゲーシオン”プログラムです。はじめまして、柳瀬凜子さん』
「う、ああ……？」

ほとんど何を言っているのか分からなかった。箱が分解して私の体にくっついた時点で、私の頭はかなり混乱していたが、それに拍車がかかった。どうして、私の名前……？」

『登録済みのパーソナルデータです』

「……」

やばい。会話が成立するような気がしない。

「ねえ、リフィレ？ だっけ？ これ、何なのよ」

『対オムニサイドOMMフレーム、試作1号機。通称“フォルデア”です』
「フォルデア……」

「ゴテゴテしている割には、可愛い名前だな、と思った。いや、今は名前はどうでもいい。」

「それで、これ、どうやって脱いだらいいの？」

『取り外しは可能。ですが、推奨しません』

「……どうして？」

『敵が来ます』

「敵って……うわあああっ!？」

その時、突如地面が揺れた。続いて、何かが爆発したような轟音が響き、窓ガラスがヒリヒリと震えた。

地震、ではない。私は揺れと轟音の正体を確かめようと、窓から外を眺める。

「あそこは、発掘現場……？」

街の中央にある小山の中腹辺りから、黒煙が噴き出している。昨日の帰

り道に見た時には白いビニールシートで覆われていた場所だ。ビニールシートは吹き飛んでしまったのか影も形もなく、大きな重機が横倒しになっている。

「なにあれ、爆発したの……？」

事故だろうか？ 誤ってダイナマイトが爆発したとか？ しかし、遺跡の発掘調査に、こんなに地面を揺らすほどのダイナマイトを使うだろうか。これは発掘すべき対象物まで消し飛ばしてしまうほどの爆発だ。

私はしばらく、発掘現場から噴き出る黒煙を眺めていた。すると、その黒煙の中から、何かが飛び出してきた。

（あれは、何……？）

見たこともない物体だった。銀色の円柱状の物体に、小さな手足のようなものがついている。距離があるので縮尺がよく分らないが、おそらく2〜3メートルといった大きさだ。それが1つではなく、無数に、それぞれ数え切れないほどの数が、黒煙の中から続々と姿を現したのだ。

そして私が驚くよりも早く、飛行する円柱達は、その表面から光を放った。その光は、雨のように地上に降り注ぐ。地上にあった建物が次々と光を浴びて、

ドオオオン！

激しい爆発に包まれた。

「……！！」

攻撃。その言葉が私の脳裏に浮かぶ。円柱は、その光、レーザーのようなもので、地上を攻撃している。それも、無数の円柱が、一斉にだ。瞬間に地上に数多の爆発が起き、家屋を吹き飛ばした。あちこちで火の手があがる。

平穏な住宅街の朝が、あつという間に、炎に包まれた。

「う、あ……何、これ……何なのよ、あれ……！！」

『オムニサイド。人類を抹殺するために作られた兵器です』

「おむに……？ 人類を、抹殺ですって……？ そんなものが、なんで、家の近所に……！」

『オムニサイドを放置すれば、世界は滅びます。柳瀬凜子、オムニサイドを破壊してください』

ちよつと待って。今この音声、何って言った？

「私が、あれを、破壊？ 倒すっていうの？ あんな、危ない光線を撃ってくる奴を相手に？ 無理に決まっているじゃない！」

『それが、あなたの使命です』

「どうして私なのよっ！」

『あなたが適任だと判断されたからです』

「適任って……そんなわけ、ないじゃないの！」

ただの学生である私が、あれと戦う？ 冗談じゃない。できるはずがない。

『大丈夫です。オムニサイドを破壊する、そのために作られたのがフォルデアです』

「これが……？」

私は自分の体に装着された金属を見下ろした。確かに頑丈そうだが、空を飛ぶ相手に、どうやって立ち向かえというのか。それも、あんなに数が多いのに。

『こうしている間にも、街に被害が広がっています』

リフィレの言うとおり、円柱が容赦なく繰り出す光線によって、街の被害は増え続けている。いつここまで攻撃の手が及んでもおかしくない状況だった。

「でも、私には、無理よ……」

『ここであなたが戦わない場合、あなたの大切な人が命を落とすことになります』

「……！ 大切な人って……浩介くんのこと!？」

今の時間だと、浩介くんはまだ彼の家にいるはずだ。彼の家の方が発掘現場より遠いから、今すぐに被害に遭うということはないと思う、けど。

「どうしてそんなことが分かるの……？」

『私が未来から来たからです』

「……え？ み、未来……？」

『15年後の未来より、オムニサイドと戦える力をあなたに託すため、私はやってきました。あなたの大切な人だけでなく、世界中の多くの人が犠牲になった世界から、私は来たのです。柳瀬凜子。お願いします。ここで戦わなければ、未来は変わりません』

「私が、未来を、変える……？」

その言葉が持つであろう重みを、私は少しも実感できずにいた。

だがもし、リフィレの言うことが、すべて本当なのだとしたら、私に課せられた責務はとても重大ということになる。

いやいや、そもそもこんな重大なことを、普通の女子生徒である私に託

そうとするのか。

「本当に、私じゃないと、ダメなの……？」

『はい。フォルデアは、この時代の柳瀬凜子の体形に合わせて設計されています。他の人間には装着できません』

「だから、どうして、わざわざ私なんか……」

『先ほども言いましたが、あなたが最も敵任だと判断されました。あなたは私のいた未来において、オムニサイドが目覚めた日、この街で唯一の生き残りなのです』

「……私、だけが、生き残った……？」

浩介くんだけじゃない。両親も、友達も、知り合いも、全員が、今日、死んでしまうと、リフィレは言っている。

簡単には信じられない。でも、目の前の光景を見ると、本当のように思える。私が戦わないと、みんなが……浩介くんが、死んでしまう。

（それだけは、絶対にダメ……！）

他に選択肢はなかった。私しか浩介くんを守れないと言うのなら、リフィレに従うしかない。

「……分かった。戦う、けど、どうしたらいいの？」

『フォルデアの操縦方法は、装着された時点でああなたの記憶領域にデプロイされています。歩くことも、飛ぶことも……戦うことも可能はずです』

「飛ぶ……戦う……」

私は目を閉じて、フォルデアの動きをイメージした。

確かに、分かる。フォルデアが、生まれてからずっと私の体の一部だったかのように、機能が理解できる。

私は窓を開け、ベランダに出た。目の前に広がるのは、オムニサイドにより一方的に蹂躪される街の姿。怖いけど、もはや一刻の猶予もない。

私は背中のあるスラストに点火する。肩のパーツが分離し、私の周囲で滞空状態を開始した。

「飛べ……！」

私は床を蹴り、勢いよく上空へと舞い上がった。



飛び方を知っているのに、実際に飛んでみると、その加速力に翻弄される。地面がみるみる遠ざかっていき、私の心臓は縮みあがった。

上空を飛ぶ私は、腕や脚に付いている補助スラスタを駆使して、姿勢を制御する。初めてのことなのに、なぜか体が覚えているという状態なので、困惑してしまう。一度自転車の運転を覚えてしまえば、体が勝手にバランスをとるような感覚に似ていた。

だが、戸惑ってばかりもいられない。フォルデアの機能なのか、眼の前の何もない空間に、次々と赤い丸印が表示されていく。オムニサイドの群れが徐々に迫っているのだ。あれと戦って倒すことが、私の目的だった。

「武器とか、ないの？」

『基本装備は、左腕のシールド内に格納された高周波ダガーです』

左腕の装甲には盾のようなパーツが付いており、手の甲の真上くらいに細長いスリットがある。

(これね……)

軽く手を振ると、そのスリットから、よく切れそうな刃が出現した。

「でも、相手は光線を撃ってくるのよ？ これで斬れるまで接近しろって言うの？」

私は刃を盾の中に戻しながら抗議した。フォルデアを装着した私には、何らかの銃器を扱える感覚がある。遠距離から攻撃できる武器があるはずなのだ。

『両肩から分離した4門のレーザー・ポッドは射撃武器です』

「ああ、この、なぜかついてくる奴ね。いいじゃない」

『レーザー・ポッドの追従は自動で行われます。攻撃は、あなたの意思によって行われます。声に出すとなお確実です』

「よし、じゃあ、攻——」

『しかし、この距離では射程外です』

「ダメじゃない！」

この緊迫した状況で、ツッコミを入れさせないでほしい。今は漫才をしている場合ではないのだ。

『では、他の武器を転送します』

「転送？」

『15年後から、武器を転送可能です。OMMフレーム本体の転送に必要な時空エネルギーは膨大で、チャージに何年もかかりますが、重火器程度のものなら、ある程度時間を置けば転送できます』

相変わらず、よく分からない専門用語を平気で使ってくる奴だ。全然理解できていないが、今は詳しく話を聞いている余裕はない。

「じゃあ、転送して」

『武装の選択は？』

「任せるよ」

『了解しました。現在溜まっている時空エネルギーを使用し、ロングレン

ジレールキャノンを送ります』

物騒な単語が聞こえた直後、飛行中の私の腰の両側に、それぞれ長い銃身の火器のようなものが出現した。

（何も無いところから現れた……!!）

「これが、転送……?」

『はい。フォルデアも、今朝、このようにあなたの部屋に転送されたのです』

「また随分、ごつい銃を選んだのね」

『高威力の長距離狙撃銃です。一部の敵は射程に入っています』

「撃っていいの?」

『撃ってください』

私はリフィレに促され、2門のレールキャノンとやらを、腕で抱えあげるようにして構えた。扱い方は、フォルデアを装着したことで、体が覚えている。

目の前の空間に2つの照準器が出現。標的である銀の円柱を狙う。2つの赤いターゲットマークが、四角い枠で囲まれた。

（ロック……そして、発射っ!）

引き金を引いた。

前に進んでいる体にブレーキがかかるほどの衝撃。片側それぞれ1発ずつ。計2発の弾丸が発射されたことで、大気が震え、衝撃波が巻き起こる。

発射された弾丸は尾を引いて空中を駆け抜け、2発とも、ターゲットにした円柱のと真ん中に命中した。

弾丸は円柱の胴体を貫通。円柱は2つとも被弾部で爆発を起こし、制御を失ったように墜落していく。

撃墜したのだ。

「やったっ!」

『その調子です』

私は次の円柱に狙いを定め、発射する。着弾。また円柱が2つ、地上へと落下していく。

（なんだ、簡単じゃない）

と思ったが、まだまだ数がある。こうしている間にも、発掘現場の黒煙の中から円柱が飛び出し続けていた。

「これ、きりが無いんじゃない?」

私は次々とトリガーを引き絞りながら、リフィレに尋ねる。

『オムニサイドは、増殖を繰り返します。端末の数は無尽蔵に増えていきます』

「なにそれ、じゃあ、あれを破壊しても、意味がないってこと？」

『手数を減らすという意味では、意味がないことはないですが、根本的な対処にはなりません』

リフィレの回りくどい言い方に、少し苛立つ。ナビゲーションプログラムとか言っていたが、もうちょっと私の聞きたかったことを汲み取ってほしい。

「その、根本的な対処とやらは、どうしたらいいの？」

『コアを、破壊するのです』

「コア……それは、どこにあるのよ」

『恐らく、最初の爆発地点、あの山の地下に』

「最初の……ねえ？ つまり、うじゃうじゃいる兵隊を突破して、あの発掘現場まで辿り着かなきゃならないってこと？」

『そのとおりです』

「……できるの？ そんなこと……」

『フォルデアは、それができるように設計されています』

「本当でしょうね……！」

私は発掘現場に近づきながら、レールキャノンを連射した。この武器は命中精度が素晴らしく、百発百中の勢いで、円柱を撃墜している。だが、円柱が増えるペースよりも早く撃ち落とせているかと言われれば、自信はなかった。視界に移る円柱の群れは、その数を減らしているようには見えない。

「そもそも、オムニサイドって何なのよ。どうして世界を滅ぼそうとするの？」

『詳しいことは分かっていません。ただ、オムニサイドが出現した地層等から判断すると、今の人類が石器時代だったころ、宇宙から飛来したものと思われれます』

未来の次は、宇宙と来た。聞けば聞くほど、話がややこしくなっていく。

『理由は分かりませんが、目的は人類と人類が作った文明の破壊です。宇宙から飛来した段階では、人類や文明を確認できずに、冬眠状態になったのでしょうか。それが、発掘により人類が触れたことで、オムニサイドが目覚めてしまった』

不発弾を掘り当てて、うっかり爆発させてしまったようなものだろうか。

発掘作業をしていた人達も、まさかそんな物騒な物が眠っているとは思
いもよらなかったに違いない。

「オムニサイドって、どういう意味なの？」

『ラテン語で“すべてを破壊するもの”の意味となる造語です』

「ふうん。ラテン語とか、まったく分からない」

『命名者は柳瀬凜子、つまりあなたです。正確には、1年後のあなた、で
すが』

「……」

私はあと1年でラテン語に詳しくなるのか。

オムニサイドに攻撃された街でただ1人生き残っただけでなく、その命
名までしているなんて、未来の私は何者なのだろうか。我が事ながら、ま
ったく想像できない。

（それ、別人なんじゃないの……？）

などと疑っていると、

『回避運動を』

「えっ……？」

リフィレからの警告。その直後、私の頭上すれすれのところを、光の矢
が突き抜けていった。円柱からの攻撃だ。いつの間にか、連中からも攻撃
できる距離まで近づいていたらしい。

円柱達は飛来してくる私を迎え撃つように、空中に静止し、一斉に光線
を発射した。

「！」

私は反射的に、体を傾けながら急降下する。私の元の飛行コースに沿っ
て、無数の光線が突き抜けた。

「く……これ、当たったら、どうなるの……？」

『シールドで受ければ無傷。装甲で受けてもある程度は耐えられます。た
だし、』

「ただし……？」

『生身の部分で受ければ、死ぬでしょうね』

「冗談じゃないよ！」

私は毒付いた。顔を含め、装甲で覆われていない部分はいくつかある。
これだけの敵に集中砲火を浴びたら、生身の部分に命中してしまう危険が
あるではないか。

「どうして全身を覆うような設計にしてくれなかったのよ！」

『機動性を損なっては意味がありません』

「私は死にたくないから！」

『回避運動を怠らなければそう簡単には命中しません』

私は地面すれすれまで降下し、道路に沿って前進する。周囲の民間は無残に破壊されていた。瓦礫の中には生き埋めになっている人がいるかもしれないが、今は止まっている余裕はない。

頭上から光線が降り注ぐ。死角からの攻撃。私は道路の幅を最大限に生かしてジグザグに飛行する。

『上を抑えられています。位置関係が悪いです』

「分かってる、けどっ……！」

頭上から狙い撃たれるのは望ましくないけれど、かといって上昇もできない。

このままでは、私自身に命中するも時間の問題だ。私は大通りから細い路地に方向転換をし、上から見えにくい位置を進む。苦肉の策だったが、ある程度の視覚遮断効果はあったらしく、降り注ぐ光線の数が激減した。

「これならっ……！」

私はその場で垂直に上昇を始める。円柱の群れが真上にあった。光線が直上から浴びせられる。私は光線を回避せずに腕で顔を隠すようにして、シールドを前面に出した。

『それは無謀です』

「もう遅いっ！」

光線がシールドに命中した。バシュウ、という音を立てて光線が弾け飛ぶ。シールドで防ぐ分にはダメージはない。リフィレが言ったとおりだ。

光線を防いだ直後、私は追従する4門のレーザー・ポッドに攻撃命令を出した。声に出した方が確実と言われたので、私は叫ぶ。

「撃てええええっ!!」

私の声に、4つの飛行物体は応えた。

バシュウウウ。発射された4つの光が、目の前の円柱に吸い込まれていく。レーザーが命中した円柱は、弾かれるように地面に落下した。

「んのおおっ!!」

私は手あたり次第に、近くにいる円柱を攻撃する。円柱が光線を撃ち出すよりも早く、こちらの光線を叩き込み、撃墜していった。

「よしー！」

近くの敵は倒せたが、まだ周囲に円柱はたくさんいる。それらが私を包

困しようと群がってくる。このままでは集中砲火を浴びるだろう。

私は飛来した光線を回避しながら、さらに上昇した。

（このまま一気に……!!）

「発掘現場は、どっちの方角!？」

『右手4時方向』

「右ねっ!」

私はスラスターの向きを強引に変え、空中で逆Uの字に大きく旋回した。リフィレの言ったとおりの方角に、黒煙が見える。

（あの中に、オムニサイドのコアがあるのね……!!）

旋回したまま、私は急降下を開始した。目標は、黒煙の立ちのぼる小山の中腹。

「発掘現場に、このまま降りるよ!」

『了解』

地面がみるみる迫ってくる。顔を下にして落下しているので、ものすごい迫力だ。私は進路を塞ぐ円柱の対空砲火をシールドで防ぐべく、再び両腕を顔の前に掲げた。

「いつけええええっ!!」

シールドに複数の被弾。続いて足の先を光線がかすめ、若干ふらつく。だが私は勢いを弱めずに、目的の発掘現場へと突き進む。

立ち塞がっていた円柱を一瞬で抜き去り、さらに降下する。

『このままでは地表に激突します。減速してください』

「……!!」

リフィレのアドバースに従い、私は全身のサブスラスターを活用して体の角度を変えた。今度は足を下にして直立の姿勢をとる。

幸い、急降下によって円柱をだいぶ引き離しており、奴らからの光線攻撃は止まっていた。

「行くわよ……!!」

眼前に黒煙が迫る。次の瞬間には、私は黒煙の中へと突入していた。視界が、黒一色に染まった。

木々が燃えたことで発生した煙だったようで、山の地下までには及んでいない。

そう、地下だ。発掘は山の中腹から真下に向かって掘り進められたらしく、縦に空洞が伸びている。日の光は黒煙に遮られ、空洞の中は薄暗かった。

「結構、深いわね……」

直径が20メートルほどの縦穴を、垂直に落下していく。底は見えない。

下降するにつれ、周囲はさらに暗くなっていった。このままでは、何も見えなくなってしまう。

「ライトとかないの？」

『この状態でライトを点けたら、敵に居場所を知らせるようなものです。暗視モードに切り替えます』

リフィレが何か操作したのか、視界が急にクリアになった。岩肌の様子がはっきりと見える。レールキャノンを構えながら周囲を警戒するが、円柱の姿は見えなかった。この中から円柱が出現していたと思ったのだが……もう打ち止めになったのだろうか。

私は再度空洞の底を見つめる。暗い状態では底が見えなかったが、暗視ができる今の状態なら、

「底が、見える……！」

数百メートル下方。空洞の底は、岩肌とは違うもので覆われていた。幾何学的な文様の掘られた金属質の床。材質は、空を飛ぶ円柱達と同じもののように見える。

「これが、オムニサイドのコア？」

『エネルギー反応は微弱です。恐らくこの隔壁の向こうに、コアがあると思われる』

「じゃあ、壊さないといけないのね……これで破壊できるかな？」

私は手にしたレールキャノンを見る。

『不明です。試してみてください』

「了解」

私はレールキャノンの引き金を引いた。弾丸は隔壁に命中する。しかし、

『目標にダメージなし』

「ダメなの？ 光線は効くかな？」

『レールキャノンが効かないのであれば、レーザー・ポッドも効果がないでしょう』

「……もしかして、打つ手なし？」

『火力の高い武器の準備はありますが、転送までにはまだ時間が必要です』

「ここまで来て、待たないといけないの!？」

『ここまで早く敵を突破できるとは、想定していませんでしたので』

「なにそれ、褒め言葉？」

などと言っている間に、空洞の底が近づいてくる。

今のところ、上からも下からも円柱が出現する様子はなかったが、のんびりしている猶予はない。

「どれくらい待てば武器を転送できるようになるの？」

『チャージまで、あと180秒』

視界の隅に、カウントダウンが表示される。

「3分……か。それまで敵が来なければいいけど」

私はゆっくりとブレーキをかけながら、隔壁の上に着地した。ゴギン、と、隔壁とフォルデアの足の裏が擦れて金属音を放つ。

隔壁は周囲の岩肌を突き抜けて、空洞よりも広範囲に及んでいるようだった。着地してみても分かったことだが、隔壁の表面は緩やかな凸状態にカブしている。

(まさか、この金属、球状なんじゃないでしょうね……)

この角度で球状の物体なのだとしたら、全体はどれくらいの大きさになるのか、想像もつかない。

(私たちの住んでいる街の下に、こんな巨大なものが埋まっていたなんて……)

武器転送までのカウントダウンは、まだ2分半以上残っていた。緊迫した状況で、ただ何もせず待つ3分間がこんなに長いとは。

こうしている間にも、外の街に被害が増え続けていると思うと、平常心ではいらなかった。

「浩介くん、無事でいてよね——っ!？」

恋人の身を案じたその時、地面、すなわち隔壁が揺れた。

「な、何……!？」

うろたえる私の足元、隔壁の表面に光る線が走った。その線に沿って、隔壁が左右に分かれていく。

私は反射的にその場で飛び上がった。隔壁の隙間に向かってレールキャノンを構える。

「何が起きたの？」

『不明です。ですが、警戒を』

隔壁は人間が通過できるほどの隙間を作って、動きを止める。

私は隔壁の中を注視した。内部は暗く、はっきりとは見えないが、何か複雑なものが、蠢いているようだった。不気味な光景に、背筋に寒気が走る。

その時、隔壁の内部で、何かがきらりと光った。

『回——』

“避”の音は聞こえなかった。空洞を埋め尽くすほどのまばゆい光が、隔壁の隙間から放たれ、私の体を包んだ。

「っ、あっぐ、ああああああああああっ!!」

次の瞬間、私の全身に激痛が走った。

(何これ、痛い……痛い……痛い!!)

フォルデアの装甲に触れた光が、バチバチと火花を散らす。逃げたいと思ったが、光が照射されている範囲は広く、逃げ場はない。私は空中で静止したまま、光を浴び続けた。

『高、電圧の……電撃……負荷上昇につき、シス、テム……ダウンし、ま、す……』

リフィレの声が小さくなり、やがて消えた。視界のカウントダウンも消失する。

両手に抱えたレールキャノンの銃身が弾け、バラバラに砕けた。

同時に、私の周囲を飛んでいたレーザー・ボッドも、電撃の負荷に耐えられずに爆発する。

「うああああああああっ!! がっ、あ、あぐああああああっ!!」

(全身が、引き千切られているみたい……これ、いつまで続くの……?)

電撃はどれくらいの間続いたのだろうか。激痛を受ける私にとっては、永遠のように感じられたが、実際は10秒程度だったのかもしれない。

やがて電撃は止み、痛みが消える。

「あ、ぐ、う、うう、ううう……」

意識が朦朧とし、体に力が入らない。背中が小さく爆発し、煙を吐いた。その衝撃で、私の体は落下し……どしゃつ、と、隔壁の上に墜落した。

(何、これ……私、どうなった、の……?)

視界がぼやける。電撃の影響か、体が時折びくびくと痙攣している。

隔壁の内部から電撃を受け、墜落した。その事実、理解が追いつかない。

い。

「リフィレ、聞こえる……？」

と呼びかけてみたが、何の返事もない。先ほどの電撃で、リフィレの機能が壊れてしまったのだろうか。

「私が、浩介くんを、守ら、ないと……いけない、のにつ……」

隔壁の向こうにあるオムニサイドのコアを破壊する。その目的を達成するまで、倒れるわけにはいかなかった。

私はフォルデアを飛ばそうとしたが、先ほどの爆発によって破損したのか、スラスターが機能しない。立ちあがろうと思っても、手足が動いてくれない。

（これで、終わりなの……こんなところで、私は……）

その時、隔壁の隙間から、金属製のケーブルが出現した。

「……！」

ケーブルの数は4本。それぞれのケーブルの先端には、巨大なレンチのようなアームが付いている。

そのアームが、ゆっくりと私の方に近づいてきた。

「ひっ……な、何……来ないで、っ……！」

殺される、と思った。逃げなければ、しかし、体は動かない。恐怖に怯える私にアームが迫る。

アームは私を取り囲み、観察するように先端を私に向けた。私は恐怖で体を小さくすることしかできない。

1本のアームが私に近づき、頭を挟もうとする。

「やっ……！」

のけ反ったところに、レンチ状のアームが閉じられた。バキン、という金属音。アームの先端がフォルデアの頭部パーツを挟み、破壊した。

「く、あ、ああ……？」

頭部装甲がバラバラになり、砕けたパーツが落下する。

（今の、もうちょっと深く挟まれていたら、私の頭が……）

アームで頭を潰されて死ぬなんて、そんな最期は嫌だった。

「お願い、やめて……」

私はアームに向かって懇願した。しかし、私の言葉が分かっているのか、そもそも私の言うことを聞くつもりはないのか、再びアームが私に迫る。

今度は頭ではなく、胴体を狙っていた。アームが私の胴体を両断する

——ことはなく、アームの先端が私の胸部の装甲を挟んで、バキバキと碎いた。あっさりと装甲は剥がれ、私の素肌、胸が露出する。

（何が、したいの……？）

私を殺すでもなく、装甲のみを破壊している。

まるで、私の装甲の強度を確かめているかのようだった。

そして再度アームが迫り、私の腕の装甲を掴んだ。そこも破壊するつもりかと思ったが、アームでがっちりとは挟み込んだだけだった。

「……！」

他のアームも私に掴みかかり、もう片方の腕、それに両脚のパーツを挟んで固定した。両腕と両脚、四肢を掴まれたことになる。

「これは、っあっ……!？」

4本のアームは軽々と私を持ち上げる。そしてアームはしなりながら、隔壁の内側へと戻っていく。

（私を、中に連れていくつもり……？）

アームにより、私は隔壁の中へ連れ込まれた。

内部は細長い通路が奥へと続いていた。アームのケーブルは、その通路の奥から伸びている。通路の先は暗く、うっすらとしか見えない。

私はアームからの脱出を試みるも、四肢はがっちりと固定されており、びくともしない。

やがて、通路の先に光が差し込んできた。光が近づくにつれ強くなり、目が眩む。

（あの先に、何かあるの……？）

瞬く間に、私は光の中に飛び込んだ。

「ここは……？」

そこは、20メートル四方くらいの空間だった。周囲の壁は隔壁と同じく、銀色の表面に何か幾何学的な文様が浮かんでいる。

その部屋の中央に、赤い球状の物体が浮かんでいた。私の体よりも大きい。3メートルはあるだろうか。

（これが、オムニサイドのコア……？）

私は直感的にそう思った。目の前に、倒すべき相手がいる。しかし私の体はアームによって拘束されており、コアに向かって手を伸ばすことすらできない。

アームの繋がったケーブルは、天井に繋がっていた。部屋の壁と赤いコアとの中間くらいの位置で、私を宙吊りにしている。

「私を、どうするつもり……？」

私は目の前のコアに向かって問いかけた。それに対する反応なのかは分からないが、球状の表面にキラキラと光が流れる。私の全身をくまなく観察されるような、奇妙な視線を感じた。

すると突然、アームが動いた。両腕と両脚を左右に広げられ、私の体は大の字の状態で空中に固定された。

「くっ、放し、なさいよっ……！」

これから何をされるか分からないという恐怖に襲われ、私は再度もがいた。しかし、アームは空中でびたりと静止しており、少しも動かすことができない。

人類を滅ぼすために作られたという存在が、私を殺さずに、こうやってわざわざ拘束する意図は何だろうか。

（標本にでも、するつもり……？）

不吉な予感が脳裏に浮かぶ。おぞましい目に遭うことを想像し、身震いした。

そして次の瞬間、天井から私を取り囲むようにして、数え切れないほどのケーブルが垂れ下がった。

「ひっ……！」

視界を埋め尽くすほどのケーブル。その先端の形状は様々で、管のようになっているもの、筆のような毛が生えているもの、ブラシのような繊維で覆われているもの、何か棒状の突起がついているものなどが見える。

とりあえず私の体を切り刻んだりするような、物騒な器具は見当たらず、安堵する。しかし、相手の意図が分からないままなので、不安は消えない。

（私、何をされるの……？ どうなっちゃうのよ……）

先端が管状になっているケーブルが複数、私の顔の近くまでやってきて、管の中からどろりとした透明の液体を垂らし始めた。

「なに、これっ……」

その液体は私の肩に垂れ落ちる。体温よりわずかに温かい感触。粘性の高いその液体は肩から徐々に私の体へと降りていく。肩から、胸へ、お腹へ、そして脚へ。管ケーブルは細かく位置を変え、私の身体中に液体をかけていった。

手から足まで、装甲で覆われているところも、そうでないところも、液体で塗りつぶされる。素肌を晒している胸も粘液まみれになり、肌が艶めかしく輝いていた。

腰に巻かれたスカートが、粘液により太ももにぴったりと張り付く。

「これ、何なの……っ!? あ、なによ……あああ、身体が、急に、熱くなつて……んあああ、あつ!!」

急に生まれた強烈な疼きに、私は思わず大声を上げてしまった。身体の奥底に火が付き、全身を切なさ包む。

原因は明白、この液体だ。液体が触れている肌が、むず痒い火照りを帯びている。

この液体には、女を強制的に発情させる、媚薬の効果があるとは思えない。

「う、あう……こんな、私の身体、ううっ……んあ、く、ううう……」

(どうして、こんなことをするの……? わけが、わからないっ……!)
アームに拘束されながら、私はもじもじと身をよじった。両手が自由だったなら、思わず自慰を初めてしまいそうな、そんな強烈な疼きに襲われていた。

続いて、先端が筆のようになっていているケーブルが、数多く私に殺到した。まるで粘液を身体中に塗り込むように、撫でまわしてくる。

「んひっ、あうっ、な、何を……んあううう……やめっ、や、やめてえっ……!!」

(ぬるぬるしたのが、身体中にまとわりついて、こんなので、私、私……) 毛先が肌の上で踊る。くすぐったさ以上に、火照った体にとっては、それが快感となっていた。

倒すべき敵の前で身体中を撫でられ、気持ちよくなってしまう。いけないと思いながらも、媚薬のせいか疼きを抑えることができない。

「っ、うあああ……んくうううっ、あ、ああ……ん、あううう……いやあ、こんなの、いやああ……」

媚薬とケーブルによって強制的に感じさせられている。望まぬ快感を与えられ、私は屈辱に顔を歪めた。

「感じたら、ダメ、なんだからあ……うっ、くうううっ、んっ、あ、ダメ、そんな同時に撫でられたら……身体中、敏感に、っああああう、ううううっ……」

二の腕や太もも、乳房の周辺など、性感帯ではない部分を撫でられているというのに、快感が溢れ出してくる。

そしてついに、筆ケーブルは、私の小さな胸をも撫で始めた。

「っ、んいっ、そこ、はあああ、胸、撫でちゃダメええっ!!」

毛先が乳房の上を這い回る。撫でられた部分が、ぴりぴりと甘い快感を生み出した。

さらに、先端がブラシ状になっているケーブルが2本、それぞれ両の乳房に向かう。ブラシは乳首を捉えると、ブルブルと振動し始めた。

「んあっ!? やっ、これ震えて……んひいいいっ! や、それダメえっ、んくううう、うう、うあああああ、気持ちよく、なるううう……!」

振動するブラシが乳首を擦る。さまざまな角度から刺激と振動を与えられ、生じた快感に私の身体がびくびくと震えた。

さらに、小さなアームのついたケーブルが出現する。アームは私の股間部分に移動し、スカートの中に入り込んだ。

「や、そこは、そこはああ……!」

ビリビリビリィ! アームが着用していたショーツに食い込み、股間部分を引き裂いた。

「ダメえ……そこは、ダメえ……」

性器が外気に触れた感触があった。私の大事な部分が、剥き出しになっている。

そこに管状のケーブルが、粘液を垂らしていく。

「ひっ、そこにかけちゃ、んあああああ……! 熱く、なるう、あそこが、熱いいいっ……!」

敏感な部分に媚薬をかけられ、疼きが頂点に達した。股間からは愛液が流れ出し、粘液とまざって内腿に垂れていく。

(身体、熱くて、気が狂いそう……我慢しなきゃ、いけないのにつ……!)

心ではそう思いながらも、身体は激しく快感を求めている。ブラシ状のケーブルや筆状のケーブルが股間に向かい、スカートの中に入っていくのを、期待の眼差しで見つめている自分がいた。

やがて、複数の筆ケーブルが一斉に私の淫唇を撫でた。

「んひっ、きううう……あ、あ、うあああああ……! こんな、いやあああああ……!」

続いてブラシ状のケーブルが、私のクリトリスに触れる。そして乳首を刺激しているように、小刻みに振動しながら擦り始めた。

「あっ、ぎいいいっ! つああ、んぎゅうう!! それダメっ、それダメええええっ!! 刺激強すぎて、んあああああ……!」

敏感な部分を一気に刺激され、大量の快感が生み出された。下腹部から爆発的に生じた快感が、脳天へと突き抜け、全身に広がっていく。

（あそこ、胸と、全身と……一斉に撫でられて、これ、気持ち、いいよお……！）

身動きを封じられたまま一方的に加えられる刺激に、快感がどんどん大きくなっていく。全身を撫でられ、性感帯を刺激され、私の性感が、どんどん高まっていった。

しかし、そんな中、私の身体の中で1つだけ、未だに切ない疼きを放っている箇所があった。それは膣内だ。

普段から自慰で膣の中をかき混ぜているため、これだけ性感が高まっている中、膣の内部にだけ刺激がないという状況が、苦しく感じられる。下腹部がきゅんと収縮し、刺激を求めてさらに愛液が流れ落ちている。

（ああ、膣中も、触って欲しい……っ!? 私は、今、何を考えてたの……?）

倒すべき相手、人類の敵を相手に、もっと気持ちよくしてほしいと願うなんて、あってはならない。私はなんとかしてこの拘束から逃れる術を考えなくてはならないのに。

「んあっ! んく、ううう、ダメえ、そんなに激しく、擦っちゃあ……んひっ、くあう、っ、あっ、あううっ、くっ……」

しかし、この拘束から逃れる術など、あるのだろうか。私はこのまま、目的も分からないまま弄ばれ続けるしか、道は残されていないのかもしれない。

そして、1本のケーブルが、私の目の前を通過して、股間へと向かう。先端にイソギンチャクのような、無数の細い触手が蠢いていた。

（あれを、膣内に、入れるの……?）

私は直感的にそう思った。と同時に、その触手がもたらすであろう快感に期待してしまった。そしてそのケーブルは、私の期待通りに股間へと向かい、先端を膣の入り口に触れさせる。

「あ、ああ、うああ、っ……」

身体がぞくぞくと震える。早くそれで膣内をかき回してほしい。そんな想いで頭の中が一杯になる。

私の指2本分くらいの太さのケーブルが、すぶりと、膣内に侵入した。じんわりと広がる甘い快感に、全身が弛緩する。

（入ってる……ケーブルが、私の中に、入ってる……）

膣の奥まで突き刺さったケーブルは、数多く付いていた触手をばらばらに動かし始めた。触手が膣のすみすみにまで広がり、その細い先端で膣壁をなぞる。



「う、くうううっ、あ、あああっ!! 中で、動いて、んっ、うあああああ
ああっ!!」

膣内のさまざまな場所を同時になぞられ、これまで以上の快感が巻き起こった。無数の指で同時にかき回されているような、自分の指では絶対に生み出せない快感が、膣内を埋め尽くす。

まるで快感を生み出す神経1つ1つが丁寧になぞられているような感覚だった。

（ダメ、これ、気持ちいい……こんなの、我慢なんて、できないよお……！）
「んあっ、く、ううあああっ、ん……あっ、あああ……！　くるっ、昇って、くるううう、ダメ、ダメえっ、こんなの、ダメえええ……！」

快感が徐々に膨れ上がっていく。湧き上がる快感の多さに、いくら自制心を駆使しようとしても、身体は耐えきれなかった。

この感覚には覚えがある。

絶頂が、近い。

「んくっ、あああああううっ、こんなの、いやなのに……身体中撫でられて、胸、震えて、あそこも震えて、中、ぐちゃぐちゃってなって……んあうっ、やああ、イきたくない、イきたくないの……気持ちいの、止まらないよお……んあっ、あっ、うあああああっ！！　ダメっ、イクっ、イっちゃうっ！　いやなのに、イク……！　イク、イクううううううううううううううっ！！　——っあ、あひいいいいいいっ！！」

ぞくぞくぞくっ、と、快感が爆ぜた。

全身を駆け巡る快感。震える身体。真っ白になる脳内。

これまでに経験した中で、最も気持ちのいい絶頂だった。

「うあ、つく……あ、ああ……うっ、あう……」

（イっちゃった……こんな機械に、イカされちゃったよう……）

悔しかった。倒さなければならぬ敵にいいように弄ばれ、絶頂してしまった自分が悔しかった。悔しさのあまり、両眼から涙が溢れ出る。

（どうしてオムニサイドが、私を気持ちよくさせるの……？　一体、何がしたいのよ……）

いくら睨みつけても、ケーブルの向こうに見える赤い球体は応えてくれない。ただこちらをじっと見るかのように、部屋の中で静止していた。

「……っ、あ、ああっ！　ま、また、動いてる……！　いやああ……これ以上私を気持ちよくしちゃ、やだああ……！」

先ほどよりは緩やかな動きだったが、ケーブル達は私への愛撫を再開した。媚薬粘液を垂らし、筆で全身を擦り、ブラシで乳首やクリトリスを刺激し、細い触手で膣内をなぞる。動きは緩やかなのに、与えられる快感は、先ほどよりも強まっているように感じられた。

（うっ、また、気持ちよくなる……なんでさっきより、気持ちいいの……？　まさか、私の身体、敏感になってる……？）

粘液を塗り込まれ、強制的に発情させられた身体の感度が、上昇している。その事実には、私は恐怖した。

（ダメっ、やめてっ……これ以上えっちな身体になったら、浩介くんに嫌われちゃう……はしたない女だって思われちゃうっ……！）

「いやあっ、もうやめてえええっ!! 私、私の身体、これ以上気持ちよくしないでっ……私の身体で遊ばないでよおおっ!!」

そう叫んでも、ケーブル達の動きは変わらなかった。ねっとり、いやらしく、私の身体に絡みつき、刺激を与え続けている。

「あっ、ああああっ、ああうっ、んんっ、ん、ああっ……いや、いや……あ、ダメそれ……私の中で、細いのが動きまわってる……さっきより敏感になって……中の動き、分かっちゃう……あ、ああ……」

湧き上がる快感を抑えきれず、私は拘束された状態で身をよじった。全身にまとわりついた粘液が、身体を動かした拍子に周囲に撒き散らされる。

既に床は粘液でドロドロに濡れていた。いや、その液体には、私の身体から分泌された愛液が、一部混じっている。細い触手が膣内にもたらず刺激により、私の秘所からは愛液が溢れ続けていた。

「あ、ああああああっ!! ダメ、そんな、うあああああ、だんだん、激しくなって……いやあああああ! また、気持ちよくなる……イっちゃいそうになる……!!」

（ダメだ……また、我慢できない。嫌なのに……こんな機械にイカされるのは、嫌なのに……私、えっちな女の子になんか、なりたくないのに……!）

だが、全身を愛撫するケーブルの動きは、時間の経過とともに激しくなる一方だった。筆は私の身体を粘液で塗りつぶす勢いで動きまわり、ブラシの振動は徐々に強くなっていく。膣内の細い触手の動きも、びちゃびちゃと暴れ回る音が聞こえるほどに速い。

ケーブル達は、片時も休まず、私を責め続ける。媚薬で敏感にされた身体では、いつまでも耐えられるものではなかった。

「う、あああああっ!! ダメっ、くるっ、またきちゃうっ……! こんな、こんなことって、う、ううう……あ、ああ、あああああ……! くう、うううっ、いや、いや、いやあ、イクのいやあああ!! うっ、あ、あああああ……ダメえええ、イぐう、イ……イ、く……イクっ!! イぎゅううううううううううっ!!!」

再び、高みへと押しやられた。

びくんと、身体が痙攣し、背中が大きく反る。アームで固定された腕の

パーツが、軋んだ音を立てた。

「ああ……うあ、あ……っ、ひゅぐっ、う……ぐ、うう……」

膨れ上がった快感により、意識が飛びかけた。

（また、無理やりイカされた……こんな簡単に……ううっ……）

このまま機械に責められ続けたら、私の身体はどうなってしまうのだろうか。さらに身体を敏感にさせられたら、ちょっとした刺激で絶頂するようになってしまいかもしれない。

連続で絶頂を繰り返せば、肉体が精神か、どちらかが壊れてしまう。

「もう、やめて……ううっ、もう、やめでよお……」

私は自分の末路を想像し、涙を流した。目の前に機械に懇願しても無駄だと分かっている。それでも、訴えるしかなかった。

すると、私の腔内から、ずるりと触手付きケーブルが引き抜かれた。細かい触手が腔の入り口を通り過ぎ、生じた快感に背中がびくと震える。

私に群がっていたケーブルも、少し離れた位置に移動した。ケーブルの束に取り囲まれているという状況は変わらなかったが、ケーブルによる刺激はなくなっている。

（あれ……もう、終わり……？）

私のお願いが通じたのだろうか。しかし、相手は人類を滅ぼす機械なので、樂觀はできない。もし本当に、オムニサイドが私を標本にするつもりなら、別の責め苦を与えてくる可能性があった。

その時、1本のケーブルが、私の顔に向かって近寄ってきた。

「いやっ……今度は、何をするつもり……？」

体を強張らせながら、その先端を観察する。そこには、黒い金属性のプレートがついていた。

（なによ、これ……）

そのプレートは私の眼前に迫ると、まるでアイマスクを当てるように、私の目と額を覆った。プレートの両側が、私のこめかみにフィットする。

黒いプレートに目隠しをされた形になり、視界が真っ暗になった。

「何が、始まるのよ……」

私は不安を隠すこともできず、そう呟いた。

すると、プレートの内側が輝き始め、私の目に光が差し込んだ。私の意識がその光の中に吸い込まれていくような、そんな感覚に襲われる。

その直後、私の意識は途切れた。

次の瞬間、私は大きなベッドの中にいた。

「あれ……？　ここは、どこ……？」

どこかのホテルの一室のようだった。明るい照明が室内を照らしている。スイートルームかと思うほど広い室内の中央に、ダブルベッドより大きなベッドが設置されており、そのベッドの中央で、私は半身を起した状態で、ベッドボードに身を預けていた。

（どうして私、裸なの……？）

私は下着すら身につけておらず、一糸まとわぬ全裸姿だった。下半身のみ、薄いシートで覆われており、シートが張り付いた両脚が、艶めかしい形状を浮かび上がらせている。

（私、今まで何をしていたんだっけ……何か、大変なことが起きたような気がするのに、思い出せない……）

この場所にも、見覚えがなかった。こんな場所に裸でいる経緯に、まったく心当たりがなかった。

（これは、夢、なの……？）

しかし、夢にしては、おしりの下のマットレスや、背中に当たるベッドボード、脚の肌に擦れるシートの感触などは、リアルなものだった。意識もはっきりしている。

「痛い……」

ぐい、っと自分のほっぺたをつねってみると、普通に痛みがあった。やはり、これは夢ではない。

ガチャリ。

混乱している私の耳に、ドアノブが回る音が聞こえた。ハッとして音のした方を見ると、

「浩介、くん……!？」

隣接する浴室のような場所から姿を現したのは、恋人の、浩介くんだった。浩介くんも裸で、下半身にバスタオルを巻き付けている。

私は自分の姿に気づいて、慌ててシートを引っ張り、裸の上半身を隠す。（どうして、浩介くんが……？）

訳の分からない状況に、私の頭はますます混乱した。

浩介くんは、笑顔を浮かべながら、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

剥き出しになった上半身の逞しい筋肉が目に入り、私は顔を赤くして目をそらした。

（いったい、何が起きているの？ 私達、どうして裸で……？ 記憶がないけど、私達、そういう関係になっちゃったの……？）

浩介くんは、私の寝ているベッドに腰掛け、顔をこちらに向けた。

至近距離に裸の浩介くんがいる。私は恥ずかしさでシーツを抱いて身を縮めた。

「浩介くん、よね……？」

「……？ どうしたんだ？」

浩介くんは微笑みながら私に手を伸ばし、頭を撫でてきた。

「ひゃっ……!？」

突然のことに、私のからだがびくりと震える。初めて私に触れた浩介くんの手。それはとても優しく、私を大事にしているということが伝わってきて、私の心を温かくしてくれた。

「緊張しているのか？」

浩介くんが顔を近づけ、私の耳元でそう囁いた。かあっ、と、私の顔が上気していくのを感じる。

恋人と、ホテルのベッドの上で、裸で向き合っている。私に経験はないけれど、これはもう、男女の行為に及ぶ流れのように思えた。

（やっぱり、私に記憶がないけれど、私達、こういう仲になっちゃったんだ……どうしよう、心の準備が、できていないよお……）

「凜子……」

浩介くんが、私を見つめている。真剣な表情。私たちは正面から見つめ合い、すうっと突き出された彼の唇に、私は――

「ん、ちゅく、っ……」

無意識に唇を合わせていた。

温かく、湿った感触。お互いの粘膜が触れ合い、リップ音が響く。互いの吐息が、熱を帯びていくのが分かる。

「んくっ、あ……ああっ……？」

浩介くんが、私の胸を隠していたシーツをそっと下ろす。露出した胸に、浩介くんの手が触れた。

「あっ……ん、ああ……」

彼の手は、とても温かかった。私と唇を重ねながら、両の手で優しく胸を揉む。彼の手より小さな胸が、ふにふにと形を変えた。

「ん、ちゅっ……はあ、っ……私の胸、小さくてごめんなさい……もっと大きい方がよかったでしょ……？」

浩介くんだって、どうせならもっと胸が大きな女の子と付き合いたかったに違いない。私の胸が小さいことで、がっかりしているかもしれないと思うと、怖くなる。

しかし彼は、

「いや、俺は凜子の胸、可愛くていいと思うよ」と言ってくれた。

「……ほんとう？」

「それに、胸の大きさに関係なく、俺は凜子が好きだから。そんなこと、気にしないで」

その言葉で胸の奥がかあつと熱くなった。

嬉しい。嬉しさのあまり、涙が出そうにある。とても幸せな気持ち私が私を包む。

「う、あ……あああ——」

浩介くんが、私の首筋に口づけをした。火照った身体に、ひやりとした唇の感触が触れ、肩がびくりと震える。

その唇は、口づけを繰り返しながら、徐々に下へと下がっていった。首、肩、鎖骨、乳房……そして彼の唇が、私の乳首へと吸いつく。

「ひうっ、っ、あああああ……！」

電流が流れたような衝撃と、甘い快感が同時に湧きおこり、私の口から甲高い声が漏れる。そのことに恥ずかしくなり、思わず手の甲で口を塞いだ。

「声、我慢しないでいいよ。可愛い声、もっと聞かせてよ」

「はうっ……！」

顔を耳元に寄せながら、浩介くんが囁く。彼の甘く囁くような声を聞くたびに、背筋がゾクゾクと震える。

頭の中が、蕩けていくようだった。ここに至る経緯の記憶がないことなんて、もはやどうでもよくなっていた。今はもう、目の前の浩介くんのことしか考えられない。

彼は一度私に口づけしてから、再び乳首を舐め始めた。

「あきゅ、ん、くああ……んくうう……」

彼の舌が乳首の突起を弾く。快感が弾け、声が漏れる。

しばらく舐めた後、彼はもう1つの乳房へと顔を移し、こちらの乳首を

も舐め始めた。空いている方の胸は、手で揉みしだき、刺激を与え続けてくれている。

「あ、ああ……んっ、んうああ……!!」

(浩介くんの舌、気持ち、いい……声、我慢できないっ……!)

口と手で私の両胸を刺激しながら、浩介くんは空いている手を私の下腹部へと向けた。シートと私の肌の間に、指先がするりと入り込む。

「あ……!! ん、そこ、は……んあ、ああああっ!!」

私の股間は、私自身が驚くほどに濡れそぼっており、そこに触れた浩介くんの指が、ぬるりと滑った。指先が秘所の割れ目をなぞり、下腹部が快感を生む。びくと腰が浮き、ベッドボードがギシギシと軋んだ。

浩介くんは私の背中に手を回し、私の身体をゆっくりとベッドに倒す。横になった私の身体に覆いかぶさるようにして、秘所と胸への愛撫を再開した。

片方の胸を揉みながら、もう片方の胸の乳首を舐め、手で淫唇をなぞる。

「ん、くっ、あ、ああ……!! んっ、それ、気持ちいい、よお……」

時々浩介くんの指が私のクリトリスを弾き、そのたびに快感が背中を走った。

快感が体内に蓄積されていく。思わず気持ちいいという台詞が漏れてしまい、そのことに気付いた私は、恥ずかしさのあまり、両腕で顔を隠した。

「気持ちよく、なってくれた?」

そんな私の様子を見て、浩介くんが顔を上げる。

「うん……」

腕の隙間から、彼と視線が交差する。彼の目を見て、彼が期待していることが、分かってしまった。

だから私は、怖かったけど、勇気を振り絞って、かすれた声でこう言った。

「……いいよ」

私だけが気持ちよくなるのではなくて、浩介くんも気持ちよくしてあげたい。だけど、私は彼を気持ちよくさせる術を知らなかった。ならば、私の身体を、彼の好きに使わせてあげるしかない。

彼は黙って頷くと、私の身体に跨り、両手を私の頭の両側についた。柔らかなベッドが弾む。

彼は再度私に口づけすると、腰に巻いていたバスタオルを外す。

「……!!」

彼の股間から伸びている、男の証。それは重力に逆らって反り上がり、見るからに硬そうになっている。勃起、しているのだ。

こんな私の身体を見て、興奮してくれている。それが何よりも嬉しかった。

初めての性行為。彼に委ねてもいいと、心から思える。

浩介くんはどこからか、コンドームを取り出し、自身のペニスに取り付けていく。私はこれから自分の中に入るであろう物体の様子を、ほんやりと眺めていた。思ったよりもシンプルな形をしているが、本当にあんなに大きなものは私の中に入るのか、不安にもなる。

「じゃあ、いくよ」

「……」

浩介くんの言葉に、私は無言で頷いた。

びちゃり。

ペニスの先端が股間に触れる。愛撫によって溢れ出た愛液が、彼のペニスにまとわりついていく。私の方は準備万端になっているのだと、本能が察した。

ぐい、と、彼の体重がペニスに乗って、淫唇を押し広げる。つぶ、と、

ペニスの先端が、私の膣内へと徐々に沈んでいく。

「ん、あ、ああ……あつ、あ……」

「大丈夫？」

まだほんの数センチくらいしか入っていないのに、強烈な圧迫感が下腹部を襲い、同時に痛みを感じた。

（っ、痛い……痛い、けど、浩介くんと、繋がりたい……だから……）

「大丈夫、っ……いいよ……き、きて……？」

歯を食いしばりながらそう告げた。

浩介くんは覚悟を決めたように、さらに体重をかける。

「う、あつ！ あ……！ あぐっ……ああああああつ！！」

ぶちっ、と、何かが裂けたような感覚。その後は、一気にペニスが私の肉を押し広げる。

想像していたよりも10倍以上の、激痛だった。

「あ……っぐあ……ん、ああ……っ、うう……」

自然と涙がこぼれた。

（これが、浩介くんと繋がった痛み……私の初めてを、浩介くんに捧げたんだ……）

決して「痛い」という言葉は発すまいと、奥歯を噛みしめる。

だが、私が耐えている様子は浩介くんが筒抜けだったようで、心配そうに私の頭を撫でてきた。

「痛いかな？」

「っ……大丈夫、だから……気持ちいい、から、動いても、いいよ……？」
本当は全然大丈夫でもなく、気持ちよくもなかった。あるのはただ、身を引き裂かれた激痛だけである。下腹部の痛みが、全身に広がっていくように感じられた。

でも、ここで止めてしまったら、初めての行為がただ痛い思い出だけになってしまう。

私は、顔の両側にある彼の手を握った。彼はそれを、強く握り返す。

「じゃあ、動くよ」

「んっ、あ、く……んんっ、っあ、ああ……くっ、ぐうう……」

すすず、と、ペニスが引き抜かれ、再度挿し込まれる。抽送が開始された。

（痛い、痛い、痛い……でも、我慢しなきゃ……）

彼が深い吐息を漏らした。その表情は、快感に震えているように見える。

（私の膣中で、気持ちよく、なってるんだ……）

私は痛くても、彼が気持ちいいのなら、それは喜ばしいことだった。そんな彼の様子が愛おしくて、下腹部から、さらに愛液が溢れる。

それが潤滑油となったのか、彼の抽送が、スムーズになった。より一層、彼が快感を覚えているように思える。同時に私も、下腹部のじんじんとした痛みが弱まっていくように感じた。

「あ、っああ……んっ、く、んんんんっ……！」

彼のペニスが膣内を刺激し、快感を生み出した。痛みの中に生まれた突然の快感に、びくんと腰が震える。

（浩介くんの、大きいのが、奥まで届いて……なに、これ……私、気持ちいい……）

すちゅっ、すちゅっ……ペニスの動きがどんどん速くなっていく。そのストロークが膣壁を擦り、そのたびに快感が溢れるようになった。

「あうう、っ、あつ、あ……ああっ、んっ、あ、ひうっ……んくっ、んっ、あんんっ……ひううううっ……！」

（浩介くんのおちんちん、気持ちいい……気持ち、いいよ……）
ずっと痛みだけかと思っていたところに、快感が生まれ、私は安堵する

とともに、悦びに身を震わせた。

彼も快感を貪るように、腰を振るう。私も感じて、彼も感じている。お互いの身体が熱を帯び、汗ばんでいく。

（これが、エッチするってことなんだ……浩介くんのこと、全身で感じる……愛されているのが分かる……）

毎晩のように自慰をしながら想像した彼との性行為が、今、現実のものとなっている。

すでに快感は全身に行き渡り、一突きされるたびに脳が甘い感覚で満たされた。

肉と肉が激しく絡み合い、お互いの身体の境界線が曖昧になっていく。
「凜子、すごく、気持ちいいよ」

「私も、気持ちいい……ああ、こんな、気持ちいいの、知らない……んああっ、んっ、はううっ！ 好き、浩介くん、大好き……！」

「俺も、好きだ凜子……愛してる……」
「ほんと……？ 嬉しい、私も、愛してるから……」

彼の言葉が嬉しくて、身体中が満たされたように感じて、目から涙が溢れた。先ほどの涙は痛みによるものだったが、今度は嬉しさによるものだった。

やがて、浩介くんは何かに耐えるような表情になる。私は理解した。射精が近いことを。

（浩介くん、イきそうになってるの……？ 私の中が気持ちいい……？ 嬉しい、とっても、嬉しい……！）

彼の性感が高まるにつれ、腰の動きもさらに加速していく。私の性感も、それに合わせて高まっていった。

「あく、んっ、あっあっ、あああ……！ 私、きちゃう……気持ちいの、来ちゃうよ……」

「俺も、気持ち良すぎて、出る……！」

「あっ、ああっ!? おちんちん、びくびくってなってる……！ あ、ああ……私、んっ、イクっ……！ イっちゃ——あううううううううんっ!!」

私の身体がぐくぐくと震え、ベッドが激しく上下に動いた。

絶頂。浩介くんが絶頂し、続いて私も。初めての性行為で、2人がほぼ同時に達したことが、彼との相性の良さを象徴しているように思えた。

私たちは繋がったまま、絶頂の余韻を噛みしめた。

「凜子、よかったよ」

「私も……気持ち、よかった……」

浩介くんの囁きを聞き、私はほほ笑んだ。幸せだった。彼に愛され、身体を重ねた。

こんな幸せが、ずっと続けばいいと思った。

「……？」

その時だった。目の前にある彼の顔が急にぼやけ、すうっと消えていく。

「浩介くん……？ い、いや……浩介くんっ！」

私は手を伸ばす。だが、指先が彼を捉えるよりも前に、彼の姿が掻き消える。

（やだ、どこにも行かないで……浩介くんっ、どこに行ったの……？）

浩介くんだけでなく、周囲の物も、消えていく。

やがて、世界は闇に包まれた。

7

私の顔から、黒いプレートが外された。

「あ……ああ、いや……こんなの、いや……いやあああああ!!」

私は自らが置かれている状況を見て、絶叫した。

薄暗い金属壁の室内。

私は床からせり上がった金属製の椅子に座らされていた。いくつものケーブルが私と椅子を束ねるように巻きついていて、体は動かせない。両脚は、膝を曲げた状態でケーブルに巻きつかれており、大きく左右に開かれている。

そして……私の股間に伸びる1本の太いケーブル。ケーブルの先端の形状は見えない。なぜなら、その先端部は、私の腔内に挿入されていたからだ。

腔内を埋め尽くす異物の感触。結合部から滴る鮮血が、ケーブルを赤く染めている。

（そんな……嘘よっ……！ 私の初めて……浩介くんに捧げたはずだったのに……！ あの痛みは、あの快感は、こんな機械によるものだったって言うの……？）

「うぐっ、ううう……ひどい……ひどすぎるよう……うっ、うあああああ



あ………！」

あまりの悲しみに、私の両眼からは、大粒の涙がこぼれた。
浩介くんと初体験は、黒ブレードの機械によって見せられた、幻だったのだ。

あの浩介くんは、私の記憶と、願望から作られたものだったのだろうか。幻の中の私は、不自然な状況と思いながらも、あたかもそれが現実のものだと思い込んでいた。

（こんなことが、許されるの……？ どうして私が、こんな目に……？）
大好きな人に処女を捧げたはずだった。しかし、現実とは違っていた。とても、残酷だった。

温かく、幸せな気分に使われていた私の心が、一瞬にして真っ黒に塗りつぶされた。絶望的な気分になる。なぜ私が、ここまでの仕打ちを受けなければならぬのか。

そんな私に追い打ちをかけるように、私に挿入された突起状の物体が、ぐじゅぐじゅと膣内を行き来し始める。

「っ、うう、んあ、ああ………！ っ、動いてる………そんなもので、私の中、かき回さないでよ………んっ、んああああああっ！」

結合部から姿を見せたケーブルの先端は、男性のペニスを模しているようだった。見た目は金属だが、表面がゴムのようなものでコーティングされており、私の膣内を傷つけることなく、スムーズに抽送を続けている。ぐじゅぐじゅと濡れた膣壁が擦られ、先ほど媚薬粘液で敏感にされた私の身体は、否応なしに快感を刻みこまれていく。

「んあっ、っ、ぎいううう……んあっ！ あ、ダメ、こんなので、気持ちよくなんて、なりたくないのに……こりこりってされたら、んあっ……私、感じちゃう……！」

（浩介くん、ごめんなさいっ……私、こんな機械に汚されちゃった……あなた以外に犯されて、気持ちよくなっちゃってるよお……）

じゅちゅっ！ じゅちゅっ！ じゅちゅっ！

金属棒が激しく暴れ回る。

処女を失ったばかりだったが、破瓜の痛みはすでにない。火照った身体は、金属棒による刺激をすべて快感に変換していた。

望まぬ形で性感が高められていく。

「んがっ、く、っうう、んいいい！ あっ、奥まで、届くう……！ どんどん、激しくなってる……我慢、できないいい、っうううんっ！！」

（もう、止めてよ……どこまで私を弄べば気が済むの……？ こいつの目的は、一体何なのっ……！）

快感から逃れようと、渾身の力をこめるが、私を縛るケーブルはびくともしない。脚を開いた状態で固定されているので、金属棒の抽送を防ぐことはできなかった。

金属棒による抽送は、一定のペースで早まっていく。それは機械的で、無慈悲だった。硬い突起が、深く、強く、私の膣中を抉る。溢れ出る快感が全身を駆け巡っていくのを、止めることができない。

「んあっ、ダメ、なのにつ……くうう、っあ、ぎひうっ……！ もう、イっちゃう……あっ、あっあっ、っ……んいいいい……イク、イクう……機械にすぼすぼされて、わらひっ、イク、イクううううっ！！ んくっ、うあああああああっ！！」

全身ががくがくと揺れた。弾けた快感がつま先にまで行き渡り、足がつるほどの衝撃が走る。

「う、うう……イきたくないのに、イカされちゃった……ひぐっ、うぐ、っう……もう嫌だよお……こんなの、いやあ……」

（私、こんなえっちな身体になっちゃった……処女も、失っちゃった……）

こんなんじゃ、浩介くんに嫌われちゃう……もう、幸せなエッチなんて、できないよお……」

「ゆ、許さない……私の身体、こんな風にして……絶対に、許さないんだから……あなたは私が、壊してや——っうううんっ！ あっ、ひぎっ、や……んあああああっ!!」

私が絶頂しても、金属棒は私を犯すのを止めない。ただひたすらに、私の敏感な部分を擦り、抉り、快感を与えてくる。

それどころか、周囲から複数のケーブルが再び私の身体にまとわりつき、ブラシでクリトリスや乳首を、筆で全身を責め始める。既に媚薬粘液で限界まで性感が高まっているところに、全身を愛撫され、快感が加速度的に上昇していく。

「ひうぎいいいい!! もう、やめてええええっ!! あっ、あうううっ!! また全身をいっべんに……んひっ、いいいいっ!! あっ、あ……ああううっ、んぎっ! ダメ、イク……いったばかりなのに、またイっちゃう……気持ちいの、止まらない……身体中、えっちな気分で一杯になる……っ、んあ、あああうううっ!! あ——ああ……っ、くりゅっ! 気持ちいいの、く……あ、あああ! っあああああああああっ!! んあああああああっ!!」

あっさりと、私は達した。ケーブル達の責めに、まったく耐えることができない。責められれば責められるだけ、快感を貪る身体に変えられてしまっている。

「うあ、ああ……っぐ、はあ、はあ……こんなことで、私は……屈したりなんか……いつ、ぎいいいい!! さっきより、激しく……んああああああっ!!」

金属棒の抽送は止まらない。さらに、その動きを激しくしていく。

(いつまで、続けるつもりなの……? 私の身体、もう、壊れちゃうよお……!)

その時、快感に震える私の目の前に、再び黒いプレートが降りてくる。幻を見せる装置が、再び私に取り付けられようとしていた。

「あ、ああ……もう、それやだ……それを付けられたら、また私、機械を浩介くんだと思って、エッチなことをしちゃうよお……これ以上、私の心を辱めないでえええええっ!!」

しかし、私の訴えは虚しく、黒プレートのついたケーブルは動きを止めることはなかった。びたりと、再び私の目を覆い隠す。

（浩介くん、ごめんなさい……私、また、あなたと……）
 プレートの内側が、眩い光を帯びる。
 私は再び、幻の世界へと堕ちていった。

8

私はまた、ベッドの上にいた。
 横になった私に、浩介くんが覆いかぶさっている。膣内には、彼のペニ
 スが挿入されている感触があった。

（私、また何か、忘れている……？ しっかりしないと、だって、ようや
 く浩介くんと、ひとつになれたんだから……）

私はぼんやりと、浩介くんの顔を見た。そこで気付く。

（ちっ、違う……浩介くんじゃ、ない……!? 誰？ 誰なの……!?）

私に覆いかぶさり、ペニスを挿入しているのは、浩介くんではなかった。
 相手の顔はどこかで見たことがあるような気がするが、思い出せない。

「ああ、柳瀬の膣中、すごく締まる。すげえ気持ちいい！」

「だ、誰……！ どうして私……？ い、嫌っ！ 抜いて、抜いてよっ！」

どうして急に、浩介くんが別の男に変わったのだろうか。浩介くん以外
 の男の人と繋がるなんて、許されることではない。私はその場で、その男
 を引き剥がそうと、手を振りまわす。

「おいおい。さっきまで大人しかったのに、急に暴れるなよ。おい、押さ
 えといってくれ」

「おっけー」

目の前の男は、誰かに声を投げかける。

「……!?」

（1人だけじゃ、ない……？）

私の頭上にも、別の男が座っていた。その男は私の両手をつかむと、私
 の頭の上でベッドに押し付けて、動かないようにする。

「な……!? 放して……放してよっ……!!」

私は力を込めたが、男が体重を乗せて押さえつけているため、手を持ち
 上げることができない。私がもがいている間も、私を犯している男は、ペ
 ニスの抽送を続けていた。

「んっ、あ、や、やめなさいっ……！ いや……いやだってば……ひぐっ、

あ、ああ……そんなに激しく突か、ないでえ……んぎいい……！ 抜いてってばあ……！！」

男のペニスは、私の粘膜を刺激してきた。浩介くんとのセックスとは違い、愛は感じられず、幸せな気分にはならない。だが確実に、私は快感を覚えている。

（いや……浩介くん以外の男に抱かれて、気持ちよくなるなんて、いやあ……！！）

そこで私は気付いた。ベッドの上にいる男は、2人だけではない。巨大なベッドを埋め尽くすように、約10人の男がひしめき合い、私が犯されるところを眺めている。その全員が全裸で、股間のペニスを露出させていた。私の姿を見て興奮しているのか、すべてのペニスが勃起している。

「ひいっ……！！ あなたたち、何……？ 何なのよお……！！ 見ないで、私を見ないでえ……！！」

異様な光景だった。周りの男達は、私とこの男の性行為をいやらしい目つきで眺めている。

「んあっ、つうう、ああっ、いやっ、あ……いやああ……！！ 突かないで……止めて、んぎっ、止めてえ……！！」

一体、この状況は何なのか。浩介くんはどこに行ってしまったのか。

「……あっ？」

その時、私は見つけてしまった。部屋の隅から、黙ってこちらを見ている男の人……それは、浩介くんだった。

（えっ……？ 浩介くん、ずっとそこにいたの……？ 私が他の男達に犯されているのに、ただそこで座っているだけなの……？）

浩介くんは衣服を身に付け、椅子に座っている。私の状況に気付いているはずなのに、動こうとはしない。

「浩介くん……！！ これはっ、違うのっ……！！ 気付いたらこうなってる……私、あなた以外の人となんて、したくないの……！！」

彼に他人との性行為を見られたことで、頭が真っ白になった。と同時に、違和感を覚える。自分の恋人が他人に犯されているというのに、浩介くんに取り乱しているような様子はない。

私が困惑する姿を見て、浩介くんは、にやりと唇の端を吊り上げた。

「……！！」

ぞくり、と、不気味な予感が背筋に走る。

「凜子、お前とはやれたから、もう用済みだ」

彼の口から出た言葉の意味が分からなかった。私の顔から、血の気が引いていく。

「……え？ 浩介、くん……？」

「お前、そこそこ可愛いから、1発やるまで付き合ってたのさ。胸がないのはがっかりだったけどな」

嘘だ。

「まあいつものことさ。俺に惚れる女は山ほどいるから、ちょっと暇つぶしに純情ごっこを試してみたが、つまらなかったな。んで、これもいつものことだが、俺がやったら、チームメイトに“おすそわけ”することにするんだよ」

嘘だ。

「それじゃあ、俺は次の女と約束があるから、もう行くわ。じゃあお前ら、ゆっくり楽しめ。壊さない程度に輪姦せよ」

嘘だ。

浩介くんは、興味を失ったおもちゃを一瞥するような眼で私を見下ろすと、部屋の出口へと向かう。私はその背中に向かって、かすれた声を絞り出した。

「そんなの、嘘でしょ……？ 浩介くん……嘘だって言ってよ……ねえ……」

浩介くん……」

あんなに優しくしてくれたのに。

あんなに気持ちよくしてくれたのに。

愛してるって、囁いてくれたのに……それがすべて嘘だったなんて、信じられない……信じたくなんてない。

こんなひどい裏切りがあるだろうか。

「浩介く——」

ボタン。

扉が閉められた。

浩介くんは、もうこの部屋にいない。喪失感に襲われ、ぼろぼろと涙が溢れた。私の体の中がぽっかりと空洞になってしまったように感じられる。私の最も大切なものが、今、失われてしまったのだ。

「あーあ。神田のやつ、バツサリ言いやがる。凜子ちゃん、可哀そうに」

「へへ。俺達が代わりにいっぱい気持ちよくしてやるよ」

周りの男の1人が手を伸ばし、私の頭を撫でた。浩介くんに撫でられた時の満たされた感じとは違い、おぞましさしか感じない。私は反射的に頭

を振って抵抗した。

「いやっ、触らないでっ……！ 私に触っていいのは、浩介くんだけなんだからっ！」

この男達に見覚えがあったのは、浩介くんと同じサッカー部の友達だから。部活をする浩介くんを遠くから眺めている際に、自然と視界に入っていたのだ。

「なんだよこいつ、可愛くねえな」

「お前はもう神田に振られたんだよ！」

「せっかく優しくしてやろうと思ってたのに、仕方ないな。ぐちゃぐちゃになるまで犯してやるよ！」

私に挿入する男の腰が、乱暴な動きに変わった。ばんばんと、私の腰に叩きつけるようにして動かしてくる。ペニスの先端が私の子宮口をこりこりと削った。

「いつ、やあああああっ！！ やめてっ！ んっ、あ、あううううっ……！ 奥までとどく……いやあ、いやなお……あ、あ……んああああっ……！！」

パンっ！ パンっ！ パンっ！

ずちゅっ！ ずちゅっ！ ずちゅっ！

男が腰を打つ音と、私の膣内が擦られる音が響く。心は快感を望んでいないのに、刺激に対し身体は反応し、股間からは愛液を滴らせている。

（浩介くん……浩介くん……浩介、くんっ……！！）

愛しい人に捨てられた。私の心は今、ズタズタに引き裂かれていた。

それなのにこの男達は、私の肉体をも、追い詰め、汚そうとしている。どうして、こんなひどいことができるのか。

「あああああっ！ いやああああ……あ、あうあああああっ！ んぎっ、っあぐっ、んんんんっ！！ やめてっ、あ、ああああっ……ひうひうひうひうっ！！」

それでも、私の身体は感じてしまう。無理やり、乱暴にペニスを突かれ、喘ぎ声を抑えることができない。

男の息が荒くなり、ストロークがさらに激しくなる。男の限界が近い。

「そろそろ出すぞお！」

「いやああ……私の中で、気持ちよくならないでっ……私の中でイッてもいいのは、浩介くんだけなのとおおおっ！！」

「おらああっ！」

男のペニスが震えた。次の瞬間、私の膣内に、熱い液体が噴き出した。
「……………えっ……………まさか、中で、出してるの……………」
浩介くんはコンドームを付けてセックスしてくれた。しかし、この男は、
あろうことか生で私とセックスしていたのだ。
中出し。男の精液が、私の膣内で暴れ回る。



「い、や……いやあああああああつ!! 中は、やだあああああ
ああつ!! 浩介くんにも、出されてないのに……あなたなんかにつ……抜
いて、抜いてよおおおおおつ!! もう出さないでええええええつ!!!」
私は喉が張り裂けるほど絶叫し、力の限り暴れ回ったが、男2人に押さ
えつけられた状況では、ペニスを引き抜くことはできなかった。

どくどくどく……男の精液が、私の中に流れ続けている。

（いやあ……私、本当に汚されてる……私の中、精液で溢れて、いっぱい
になっちゃってる……熱い、これ、熱いよお……!）

流れる精液が膣壁を擦り、その熱で、私の体温が上昇しているように感
じられる。刺激が、快感へと変わっていく。

「あ、うぐっ……熱い……あ、ああ……! ダメ、これ、気持ちよく……
あ、ああ、つあああああああつ!? イ、くーイク……! 中に出され
て、いやなのにつ、あ! ああ!! イク! イクのおおおおおおつ!!」

灼熱の快感が全身を焦がす。激しく腰が跳ね、ぎしぎしとベッドが揺れ
る。

（何、これ……? 精液だけで、私、イっちゃった……中に出されて、気
持ち悪いのに、汚らわしいのに、赤ちゃんできちゃうかもしれないのに……
……気持ちよくなっちゃった……）

「へへへ。柳瀬、いきやがった。嫌がっていたのはフリだけかよ」

「神田以外の男でもイクくんじゃねえか。結局男なら誰でもよかったんだ
ろ? このビッチめ」

（違う……私は、浩介くん以外の男となんて、したくないのに……! 誰
でもいいなんて、そんなわけないのに……!）

男達の言葉に対して、私は涙を流した。反論したかったが、絶頂の余韻
が身体を包み、うまく言葉が出ない。

「うあ、ああ……っ、くうう……そんなこと、言わないでえ……」
「ふう。最高に気持ちよかったぜ。次はだれがやる?」

男の言葉に、私の身体がびくりと反応した。

（次……? 次って……まだ私を、犯すつもり……?）

よく考えればそれは、当り前のことだった。なにしろここには、全裸の
男が10人いるのだから。1人が射精し、満足したとしても、まだ9人の
男が残っている。彼らが私に対して、何もしないわけがなかった。

「俺、いかせてもらうわ」

男の1人が近寄ってきて、私を転がし、うつ伏せの状態にする。

「きゃっ、な、何を……？」

そして私のお尻をつかむと、ぐいっと自らの腰の位置まで引き上げた。背後から、ペニスを私の膣へと向ける。

「やめてっ……もう、やめてよぉ……やめてええっ！ これ以上は——っぎいいいいっ！！ んぁっ、入って、くりゅうう……！！」

すちゅっ、と、男のペニスがねじ込まれた。愛液と精液で濡れた膣内は、簡単に男のペニスを受け入れてしまう。あっさりと最深部に到達したペニス。反り返った先端部が、私のお腹の中をこりこりと擦った。

「あ、ああ、んぁっ、後ろから、なんてえ……んぎっ、あ、動いちゃ、あああああっ！！」

男は私のお尻を掴んで、ぐいぐいと引き寄せながら、自らも腰を振り、ペニスを私の奥へ奥へと突き入れた。じゅぼじゅぼと、水音が響き始める。

私はベッドに顔を伏せながら、湧き上がる快感に耐えた。もう嫌な相手との性行為で、絶頂に達するわけにはいかない。少しでも、快感を抑えなければ。

「俺の相手もしてくれよ」

その時だった。別の男が私の髪をつかみ、ぐいっと引き上げたのだ。

「痛っ……や、放し、てえ……っ、ひっ……！！」

引き上げられた私の顔の前に、男のペニスがあった。大きく勃起したその先端が、私の口の前にある。

「啞えろ」

「な……い、いやよっ……そんなの啞えるなん——っぶうううう！？ んぶぶうっ！！ ん——！！ んんんんっ！！」

問答無用とばかりに、男のペニスが私の口に捻じ込まれた。一気に喉の奥まで突き入れられ、苦しさで顔が歪む。

（なに、これ……私、男の人のおちんちん、啞えさせられてるの……く、苦しい……息が、できないっ……！！）

髪を掴まれたまま勢いよく引き寄せられているため、吐き出すことができなかった。顎が外れるほど奥まで捻じ込まれており、歯を立てることすらできない。

私は前後から突かれながら、必死に両手で身体を支えた。突かれるたびに身体から力が抜けるが、手の力を弱めると、掴まれた髪への痛みが増すため、それもできない。

私は前後からの責めに身体を揺さぶられながら、高まる性感に耐え続け

ていた。

「っぶ、ぐ、ぐぐぐ……んぐうううっ!! ぎぐうっ! んっ、んんんっ!! んっ、ん——んぶうううううううっ!!」

(ダメ……口の中、かき回されて、意識が朦朧としちゃう……! あそこを突かれる快感を、我慢、できないっ……!)

じゅぶぐっ! じゅぶぐっ! じゅぶぐっ!

私を突くペニスの数が増えたことで、いやらしい水音も2つに増えた。

「っむううう……!! んぐっ、んんっ!! んっ!! ぎむううううっ!! っぶう! んむぶう! んぐうううううううっ!!」

近くにいた別の男が、暇だとばかりに、無造作に私の身体へと手を伸ばす。ぐにっと胸を掴み、ぐにくにと手のひらで弄ぶ。

(や……胸、ぴりぴりする……快感が増えちゃう……触っちゃ、ダメええっ……!)

「柳瀬、胸小さいなあ。これじゃあ神田に捨てられるのも仕方ないぜ」

「本人も気にしてるんだから、言ってるなよ」

「じゃあ、俺達が揉みまくって大きくしてやろうぜ」

さらに別の男が、もう片方の胸も揉み始める。臍と口をペニスで突かれ、両胸を刺激され、ますます快感を制御できなくなっていた。

(ダメ……このままじゃ、また、イっちゃう……もう、我慢できないっ……!)

「ふぐううっ!! んぐむうううっ!! んんっ!! んんんんっ!! ぐ、む、ふむう……ん——ふぐううううううっ!! んみぐうううううううっ!!」

男に挟まれながら、私は達した。腕の力が抜け、男に掴まれた髪が再び痛みを発する。

「おっ、柳瀬、いったのか?」

「簡単にイクよなあ。やっぱり柳瀬、誰に犯されても感じる淫乱なんだよ」
(違うっ……私は淫乱なんかじゃ、ないっ……!)

「んぐぐぐっ……っ、ぐ……ぐむう……」

口を塞がれた状態では、抗議することもできなかった。

悔しさで涙が溢れる。しかし、抵抗したくても、この状況では何もできない。

私が絶頂したからといって、男達は快感を貪る行為を止めなかった。それどころか、男達の腰の動きが早くなっていく。挟まれた私の身体が悲鳴を上げた。

「ふみゅぐううう！ んっ！！ んぐぐっ、ぶじゅるぐっ……んじゅっ！ んっ！！ んんっ！！」

「よし、俺もイクぞ！」

「俺もだ。ブチまけてやる！」

「みゅあめふっ！！ ふあむえふえええええっ！！」

バシユウウウ！ と、精の弾ける音がした。再び膣内を熱いものが満たしていく。同時に口の中でも撒き散らされ、口内が精液まみれになった。

むせかえるような雄の匂い。初めて味わう精液の味。その液体は、苦みと甘みが入り混じったような味がした。

「ぐ、ぐぶっ、んぶ……っば、くう、げほっ！ げほっ！ つ、はあ、はあ……」

男のペニスが口から引き抜かれ、私は口に含んでいた精液を吐き出す。白濁液が、だらりと口周りを汚した。目から流れた涙と精液が混ざって、私の顔をドロドロにする。

「んきゅううっ……！」

勢いよく、膣からもペニスが引き抜かれ、その刺激で甘い声が漏れた。男達の手から解放された私は、どさりと、うつ伏せでベッドのマットに沈む。

「ほい。次の奴？」

「あーい」

休む間もなく、次の男がやってくる。その目は、欲望にまみれていた。

「い、いや……もう、いやああ……！ 私、妊娠したくない……！」

ぞぶり。男のペニスが、容赦なく私の中に挿入された。

その後、私はその場にいる男達に、代わる代わる犯された。

ある時は、正面から抱き合った状態で、

「ひぎいうううっ！！ んがっ、あ、あぐううう！ ちゅぐううっ!? や、

キスしちゃ……っぶぐううう！！ んんっ！！ いやっ、キスはいやあああ

——ぶぐるむっ、んんっ！！ っむううううっ！！」

ある時は、男の上に跨った状態で、

「っ、あ、あああああううっ……これダメえ……奥まで、すんすんくるっ……んあぐっ！！ あ、あああああああつ！！ ひぐっ！！ あ……気

持ちいの、くりゅううう!!」

ある時は、仰向けに寝かされ口と膣の両方に突っ込まれた状態で、
「っううぶう! んく、んくう……じゅぶむぐううっ!! んじゅっ!!
ぶぐぶじゅっ!! む、むぐ、んんんんんぐっ!!」

次から次へと、男達はやってきて、私を犯し、私の中や身体に向かって射精をする。それを繰り返した。10人目の男が射精をしても、時間が空いて再度射精できるようになったのか、もう1度1人目の男がやってきて、私を犯した。男達の性欲は底なしなのか、何度射精しても、しばらくすると再び股間のペニスを勃起させている。

そんな男達に、私は性欲処理の道具として扱われ続けた。

男達に責められている時間に比例して、私の身体は敏感になっていく。無理やり犯されることが、まるで女の悦びであるかのように、身体は快感を生み出してしまふ。快感は私を絶頂へと誘う。何度も、何度も。イカされるたびに絶頂までの間隔が短くなっていく。

犯され、射精され、犯され、射精され……その繰り返し。男達はサッカーボールをパスし合うように、私の身体を交代で責る。文字通り、私は回され続けた。

男達の吐き出す欲望により、私の体が真っ白に染まっていく。

「あつ、あ……うああ……んぐつ、あううう……んつ、あ、あ……イ、イくう……まだ、イ、くううう——う、うう……あああ——」

そして私は、何度目か分からない絶頂と共に、意識を失った。

9

びくん。

身体の震えて目が覚めた。

「うう……あ……うあ……?」

どれくらい気を失っていたのだろうか。

2度目の幻の中で、浩介くんが捨てられて、サッカー部の男子達に犯され続けたことを覚えている。黒いブレートを外された今は、あれが幻のものだったと理解できるが、幻を見ている最中は、それが幻だと認識するこ

とはできなかった。

現実での出来事と同じように、最愛の人に裏切られた経験が、深く私の心に刻みつけられていた。

「んっ……んんっ……ああっ……っ？」

びくん、びくん。

再び身体が震える。

（私の、身体……熱い……）

目を開けると、私の体は金属の槽の中に寝かされていた。槽の中は熱い液体で満たされており、私の全身を包んでいる。槽の片側が斜めになっているので、私は顔だけを液体から出した状態だった。

（まるで、お風呂に入っているみたい……）

熱い液体に体を浸しているというこの状況は、バスタブの中に身を沈めて入浴している状態に似ていた。

（体、動か、ない）

槽の側面の一部がぐにやりと突き出ている、両手両脚のパーツに巻きついている。私の体は槽の内側に拘束されてしまっていた。これでは、この槽から出ることができない。

（お風呂というより、狭い水槽に押し込められた魚ね……）

私はぼんやりとした思考で、自分の身の状況を、どこか他人事のように眺めていた。体がガッチリと拘束されているという以前に、私は体力が尽きていて、自分の体に力を込めることができない。指先をわずかに動かすことすら、今の私にとってはものすごい重労働だった。

私の体力や思考力を奪っているのは、やはりこの液体だろう。これまでの凌辱で疲弊している身体を温かく包み、肉体と精神を弛緩させる。

「っ、あ……ああっ……ん、っう……」

全身が火照っていた。液体に触れている部分が、燃えるように熱い。高まった性感が疼きとなって、私の中で渦巻いている。

（この液体、えっちな気分になる液体なんだ……）

私の身体が浸かっているのは、オムニサイドによる凌辱で垂らされた、あの媚薬粘液だろう。気を失っていた私がどれくらいの時間、この液体に浸かっていたのか分からないが、全身の疼きはかなりのレベルまで高まっている。

（それに、これ、振動しているの……？）

水槽自体が微弱に振動しており、私の身体にまわりつく液体もまた、

振動していた。液体の振動が程良い強さで全身を刺激する。まるでマッサージを受けているかのような心地よさを感じるとともに、その刺激すら、火照った身体は性的な快感に変換してしまう。

「んっ、んあっ、ブルブルしてて、これ……」

（気持ち、いい……！）

私の肌は、その表面がすべて性感帯のように、敏感になっていた。全方位からやってくる液体の振動は、全身への愛撫となって、私を柔らかな快感で包む。

「あっ、あ、ああ……んっ、んんっ、はあ……はあ……んくうう……！」

（あんなにいったのに、私の身体、まだ気持ちよくなりたいの……？ ほとんど敏感になって、私の身体じゃないみたい……これ以上敏感にさせられたら、私、どうやって生きていけばいいの……？）

そんな私の嘆きすら、振動による全身愛撫は呑みこんでいく。

思考がさらにぼやけ、もはや何も考えられない。すべてが、どうしてもなくなっていく。

このまま目を閉じて、快感に身を任せようと思った、その時、部屋の中からある赤いオムニサイドのコアが怪しくきらめき、周囲から3本のケーブルが私に近づいてきた。

（また、なのね……）

タイミング的に、私が目覚めるのを待っていたのだろう。

ケーブルの先端には、細いイソギンチャク状の触手の束が生えている。

またあのケーブルで、私を責めるつもりなのだ。

（好きにしてよ、もう……）

私は完全に、抵抗を諦めていた。私はもう、オムニサイドの玩具なのだ。気持ちよくさせるも、絶頂させるも、好きにしたらいい。

私がぼんやりと眺める中、ケーブルの先端はトブン、と、私の身体めがけて、液体の中に入ってきた。3本の触手が、迷いのない動きで、私の両胸の乳首と、クリトリスに辿り着く。

「ふあ……あ、ああ……ああああっ!!」

触手の先端が、乳首に絡みつき、うねうねと撫でまわす。同時に、クリトリスの皮が細い触手により左右に開かれ、剥き出しになったクリトリスが優しく弾かれる。

敏感な部分に強烈な快感が生まれ、ぼんやりとしていた私の意識が急速に覚醒した。液体の振動が、乳首やクリトリスを撫でる触手に伝わり、小

刻みに刺激を送り込んでくる。

媚薬で感度が限界まで高まっていた身体は、

「あつ、ひぐつ、んっ……っ、うんんっ……！ あ、あつ、あああつ、ひいぐうう、イ……イ……イっ、きゅううううううううっ!!」

あっさりと高みへ達した。頭の中が真っ白になり、全身を浮遊感が包む。

私が絶頂しても、触手ケーブルの動きや液体の振動は止まらない。刺激は絶え間なく送り込まれ、私の性感は治まらず、絶頂状態が、長く、長く、いつまでも続いた。

（イってる……いったまま、戻ってこない……胸とクリトリス撫でられて……これ、気持ち、いいよお……）

びく、びく、びくん！

私の身体は、水槽の中で痙攣を繰り返した。

「うあつ……あ、あああ……んあつ、う……あああ……」

顎がぐくぐくと揺れ、舌がだらしなく垂れる。視界がぼやけ、焦点が定まらない。

そんな状態がどれくらい続いたのだろうか。私の視界に、もう1本のケーブルが飛来した。

「う、あ……？」

そのケーブルの先端には、男性器を模した突起が付いている。

（ああ……あれで私の膣中、ぐちゃぐちゃにする気なんだ……）

私が欲しいと思ったものを、オムニサイドは的確に用意した。限界まで敏感になった全身を愛撫され、絶頂の高みに押しやられている状態で、膣中を突かれたら、どれほどの快感が生まれるのか、想像もつかない。

私は目の前の突起がもたらす悦楽の世界を想像し、ごくりと唾を飲む。

その時、

ギューイイイイン!!

激しい音を立てながら、ペニス型の先端部が、回転しながらピストン運動をして見せた。

「え……？」

音と同様に、激しい動きだった。ピストンも回転も、1秒間に数十回は行われているのではないかと思うほど、高速である。

（これを、私の中で、やるの……？ 嘘、でしょ……？）

先ほどまでの期待感とは打って変わって、寒気がするほどの恐怖が襲う。私の膣の中でこんなに激しい動きをされたら、快感どころではない。



（私の中、壊れちゃう……！）
「それは、やめ、て……」
ペニス型の突起は、いったん激しい動きを止めると、私の下腹部に向かって液体の中に入る。その先端が私の淫唇を捉え、膣内にずぶずぶと沈んでいく。

「んひっ、いっ……んくううっ……!!」

さんさん凌辱を繰り返された私の秘所は、易々と突起を飲み込んだ。

「や、いや……中で動くのは、止めて……?」

私の恐怖は頂点に達していた。今、先ほどの高速運動を行われたら……そう考えると、泣き叫びたい衝動に駆られる。

(まさか、本当に、やらないよね……?)

私は、上目遣いでオムニサイドのコアを見る。すると突然、

ギューイイイイイン!!

私の中で、突起が暴れ出した。

「んがっ!? ぎっ!? が……んが、あああああああああっ!!!」

ドドドド、という轟音が、体の中を経由して鼓膜に響く。

高速の抽送と回転は、私の腔壁を挟り取る勢いだが、水槽に満たされた液体が潤滑油になっているのか、その動きはスムーズだった。

よって私の腔内は、その暴力的な動きを、すべて受け入れてしまっている。

「ううっ……!! あう……あ——あが……っぐ、こが……あ……

……あ、ああっ……っ……!!」

強烈な摩擦がもたらしているのは、快感なのか、痛みなのか、それすらも分からない。突起の先端が子宮の入り口を連続で叩き、その門を破壊する勢いだった。あまりの振動に、内臓が破裂するのではないかという恐怖に襲われる。

「あっ、あっ。あ……ああ……ぐがああ……っ! があっ……こ、おこおっ

……あ……あ、ああ——ううっ、うっ、うぐおおおおっ……!!」

私の口から洩れる音声は、もはや人間のものではなかった。唸り声のようなものを発しながら、腔内への攻撃を耐える……いや、この刺激に耐えることなど、できるわけがない。

「ぐあっ、ああ……んぐっ、こ、おこ……これ、強すぎい……んぎっ、

あ、がが、んがああ……! こわれる、わだひっ、こわれじゃう……!」

っ……おおお!!」

(奥、何度も突かれて、気持ちいい……こりこりって、回転しながら挟られたら、こんなの、気持ち良すぎるよお……!)

私は苦しみを覚えていたが、それと同時に、敏感な粘膜を刺激されたことによる快感をも覚えていた。

快感に敏感な私の身体は、すぐに絶頂へと到達した。

「あ……ああ……っ——く、ひゅうう………つあう!! んっ、あ……ああ……うあつ………」

(私、跳んでる……気持ち良すぎて、イっちゃって……もう、何も考えられない……このまま、もっと気持ちよくなりたい……)

全身を締め付けられるような感覚。気持ちよさを感じているはずなのに、強烈すぎる刺激により苦痛も感じている。苦しんでいる私と、感じている私、2人の私が、この身体の中でせめぎ合っていた。

「あつ、がああ………! 止めでっ、ぐ、あううっ………! もうやめでええっ………! これ以上されたら、ほんどうにこわれじゃうううう………!! じぬっ、わだしっ、死んじゃううううう………!!」

(もっと、もっと突いて………! 私のこと、めちゃくちゃにして………! 快樂のことしか考えられなくなるくらい………いっぱい、気持ちよくしてえ………!)

当然のように、私が絶頂しても、突起の凶暴な動きは止まらなかった。がくがくと震えている私の身体を、容赦なく責め続ける。

「あ! ああつ!! がっ………ぎ、うああ………おっ、ごおっ、あぎぐっ!! あ………いぐう!! いぐううううう!!」

(また、イってる………気持ちよすぎて、すぐイっちゃうよお………お腹の中、ドリルと媚薬で一杯になって、くちゅくちゅ言ってる………)

再度の絶頂。絶頂の予兆などなかった。突起のピストンと回転により跳ね上げられるように、媚薬漬けの身体は強制的に達せさせられてしまう。肉体も、精神も、限界を超えた。ブレーカーが落ちるように、私の意識がブツンと途切れる。

(あ、もう、ダメ………意識が、飛んじゃ………う——)

しかし、オムニサイドは気絶を許さなかった。

バリバリバリバリ! 閃光と激痛。水槽内の液体に眩い稲妻が迸り、私の体に突き刺さった。

「あああああああああああつ! あつ、がああああああああああああ!!!」

私の意識は強制的に覚醒させられた。私が意識を戻したことを確認したのか、電撃が止む。

(ビリビリしたのが、私の身体を走って………敏感な肌が、チクチクする………痛いのに、感じちゃう………!)

休息をとらせるつもりはないということだった。

「うがあううっ、んぐっ、がつ、はあっ……つううう……ぎういつ!?
つあああああつ……壊れる、わらひっ、ほんとうにこわれりゅううう
うう……もうやめれっ、つあ……っ、が……っお、んんっ!! ……ああ、
もうやめでええええええええっ!!!」

ギューイイイイイン!!

ドドドドドド!!

ぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ!!

私の膣中がめちゃくちゃにかき回され、抉られ、削られている。拘束された状態ではこの拷問のような責めから逃れることはできない。

苦痛も快楽に変わるほど、敏感な身体にさせられていたことが、幸いなのかもしれない。

(ずんずん響く……気持ちいいのが溢れて、お腹、きゅんってなって……身体、びくんってなるのが止められない……ああ、ダメ、このまま続けられたら、私、また、意識が飛んじやう……)

「あああああ——っ!! ああああああああ——う!! んぎっ、あ、うあああああああああ—— あ、うあ……? っ……あ——

——あ——」

再び私の意識は飛んだ。電池が切れたかのように、水槽の中でぐったりと気を失う。

バリバリバリバリ!!

容赦なく、電撃が繰り返された。

「んぎいいいっ!! がつ、ぎぎゅうううううううっ!! これやだあああああああつ!! 痛いっ!! お腹の中までビリビリしるのおおおとおおお!! やめでええええええええっ!! 死ぬうう!! 死んじやうううううううう!! うあああああああああああつ!!!」

液体を伝って体の裏側まで電流が流れ、全身に激痛をもたらす。挿入されている突起を伝って膣内にも電流が届き、体の内側から苦痛が沸き上がる。

電流が止んでも、水槽の中で、びくんびくん、と、身体は痙攣し続けた。

「あ、が……ああ……ううううう……ぐじゅぐじゅが、とまらないよお……ああつ、つ、がうっ……! やめ……ぬあああああうっ!! ぐっ、ぎがつ……! あ……あが……あ、ああ——」

(気持ちいのどんどん溜まって、いきっぱなしになって……ダメっ、また、

バリバリバリ……！ 私としては氣を失っていないつもりだったが、オムニサイドの判定の結果、また電流が流された。

「ういぎいいいいいっ!! 飛んでないっ!! 気絶してな、ぎっ……あ、ぐきいいいいいいっ!! いやああああああっ!! いやっ! いやああああああっ!! もういやあああああっ!! やめでええええっ………もうやめてええええええええええっ!!!」

（びりびりも、じゅぼじゅぼも、きもちいい……もっと、もっとして……
もっとはげしくしてえ……）

電撃と抽送で、身体は激しく痙攣し、脳がぐわんぐわんと揺さぶられた。意識が朦朧とし、視界が歪む。

電撃が止まらない。私は意識を保っているつもりでも、オムニサイドからすれば、ずっと気絶しているように見えるのだろうか。

「おう、ごとおおとおおつ……んぐおおおおおつ……ああっ!? イく
つ!! イぐうううううう!! ビリビリしながらイぐううううつ!!
あくつ!! おつ、ごとおおとおお!! おごおおおつ……!! んぎい
いっ!! んひっ!! ついひいひいひい!!」

（イクっ……電撃流されながら、お腹の中かき回されて、またイクっ……！
気持ちいい……気持ちいい……あ、またイクっ……！ 何度でもイっちゃ
う……！）

絶え間なく襲い続ける快感と苦痛に、私の身体は悲鳴を上げていた。今この瞬間に事切れてもおかしくない。オムニサイドに精神と肉体を弄ばれ、最期は痛みと快楽を同時に与えられながら、死ぬ。それが私の人生なんだと悟った。

「ああああっ!!!　んあう!!　——あ……あ……んあ……か——　——はっ
あ……あ……う……あ——　——ひう……あ……　——

電撃と抽送は続いている。

やがて、私の視界はブラックアウトした。

もう何も聞こえない。もう何も、感じない……

『自己修復完了。再起動しました』

(この声……誰だっけ……?)

『転送に必要なエネルギーのチャージは終わっています。武装の転送を行いますか?』

(転送……? 武装……? それって、何……?)

『装着者、柳瀬凜子の生命維持レベル、著しく低下。状況判断の能力がないと判断し、私の判断で武装の転送を開始します』

(そう、リフィレだ……私、オムニサイドと戦って……)

私は目を開く。水槽の中でケーブルに犯され、断続的に電撃を浴びせられる我が身。快感と苦痛が再び襲ってくる。

そんな私の両肩にくっついた状態で、砲身が出現した。長さが1メートルほどの双砲の先には、オムニサイドのコアがある。

この砲身が何を撃ち出すものなのか分からないが、今発射すれば、オムニサイドのコアを捉えることができる。

砲身には引き金がついていたが、私の両手は水槽に固定されていて動かせない。だから、

「撃って……リフィレ、撃って……!」

私はかすれた声を絞り出した。

『了解。荷電粒子砲、発射します』

リフィレがそう告げると、砲身の先端が光り、二筋の光線が撃ち出された。

閃光が、狭い空間を埋め尽くす。

放たれた光線は、オムニサイドのコアに命中するかに見えたが、次の瞬間、オムニサイドの表面が激しく光り、赤い球体からも光線が撃ち出された。

リフィレが放った光線と、オムニサイドが放った光線が、激しくぶつかり合う。

「うっ……」

光がさらに強くなった。

光線と光線が衝突した衝撃で、無数の細かな光線が室内に降り注ぐ。金属の壁や床、天井に次々と命中し、穴をあけ、爆発を引き起こす。

分裂した光線の1つが私を拘束する金属の槽に命中し、真っ二つに砕い

た。

「あ……」

拘束が解け、私は床に落下する。私を責め続けていた突起が膝から抜け、部屋の隅まで吹き飛んでいった。槽を満たしていた液体が周りに飛び散っていく。

両肩の砲身がひしゃげ、折れ曲がり、千切れ飛んだ。同時にコアの方もエネルギーが尽きたのか、光線がすうっと引いていく。

両者が放った光線の衝撃が生んだ被害は大きく、複数の爆発によって生まれた煙が、辺りを包んでいた。天井から次々と金属片が落下してくる。

（コアは……？）

私は煙の中、オムニサイドのコアを探す。その時、煙の向こうで何かがきらめいた。見覚えのある光……オムニサイドのコアの表面を流れる光だった。

やはり、コアはまだ健在だ。

（破壊……しないと……！）

「う、ぐ……うう……！」

私は激痛と疼きに包まれた身体を何とか制し、立ち上がる。生身だったら立ち上がることはできなかっただろうが、フォルデアのアシストのおかげで、ふらつきながらも両の脚で立った。

オムニサイドのコアまで、目測2メートル。今の私には絶望的に遠い距離。

（だけど、届かない距離じゃない……！）

スラスターが破損しているの、飛ぶことはできない。私は一步を踏み出す。

足のパーツが金属の床を打つ。その音に反応したのか、正面からケーブルが飛来した。鋭利に尖ったその先端が、私の顔に向かってくる。

「っ……！」

私は顔をかがめてそのケーブルを回避した。先端はかすかに額にかすり、チクリという痛みが走る。裂傷から私の顔に鮮血が滴った。

ケーブルの攻撃により体をふらつかせながらも、私はさらに足を踏み出す。

（あと、1歩……！）

周囲からケーブルが殺到した。

その多くは装甲が弾いてくれたが、1本のケーブルが右肩に突き刺さる。

「あぎううっ……！」

焼けるような痛み。右腕がだらりと垂れ下がる。

だが、私は前だけを見ていた。

（よくも……私の身体、弄んで……エッチに改造して……許さないんだからあっ……！）

「こんのおおおおおっ!!」

私は右足を踏み出すと同時に、左手を振りかぶった。手首を振り、シールドに内蔵されたブレードを出現させる。出現したブレードは、小刻みに振動し始めた。

私は拳を突き出すように、ブレードの切っ先をコアの表面に叩き込む。振動するブレードは、コアの表面を削りながら、奥へ奥へと進んでいく。「うおおおおおおおっ!!」

火花を散らすブレード。

その時だった。激しくコアの表面がきらめいたかと思うと、その輝きがブレードを伝って私の方へ移動し、体全体を包んだ。

そして次の瞬間、コアの表面に大きな亀裂が走り、真っ二つに割れる。ビキィッ!!

破碎音と共に、砕けたコアが床に落下した。

私に飛びかかるようにするケーブル達の動きが止まったのは、それと同時にだった。

（やった、の……？）

オムニサイドのコアを破壊した。

これで、私の役目は終わったのだろうか。

周囲の金属壁の崩壊が早まっていく。このままでは生き埋めになってしまっただろう。だが、私の体は、これ以上動きそうになかった。

「ねえ、リフィレ……」

『はい』

「私、未来を守れたのかな……？」

『はい。凜子、あなたはやり遂げました』

「そう、なら、よかった……」

私はその場に倒れる。

私の周囲を、砕けた金属の破片が埋め尽くしていった。

「ぶはあっ……死ぬかと思った……」

崩れた山肌から私は顔を出し、新鮮な空気を肺に送り込んだ。

オムニサイドの崩壊により、あわや生き埋めになるかと思われたが、リフィレが予備のスラスタを転送してくれたおかげで、間一髪のところで脱出できたのだ。

「もう、限界……」

私は土の上に仰向けに倒れる。全身の痛みがひどく、もう1歩も動けそうにない。

「っあ……く……血、止まるかな……」

私は右肩の傷の様子を見る。ケープルの刺突は肩を貫通こそしなかったものの、深く傷を残しており、明らかに今すぐ病院に行って治療を施すべきだった。

しかし、周囲の光景を見るに、それは難しいように思える。

円柱の攻撃により破壊された街並み。至る所から煙が立ち上っている。自衛隊の物と思しき戦闘機やヘリが上空を飛び交っていた。

だが、空に円柱の姿はなかった。オムニサイドのコアを破壊したことで動力を失い、すべて地上に落下したのだ。

『お疲れさまでした、凜子』

「お疲れさま、リフィレ」

私は身にまとったフォルデアの状態を確認する。電撃やアームによって破壊され、ボロボロだった。こんな状態で、よくオムニサイドを破壊し、脱出できたものだ。

「これで……未来が変わるのよね？」

『はい。オムニサイドに滅ぼされた世界から、平和な世界へと、変化するはずです』

「平和な世界になったら、このフォルデアも、存在しないことになるのかな？」

『いいえ、当機が存在がなければ、オムニサイドの打倒はありませんでした。オムニサイドの脅威は去りましたが、15年後の未来から、当機をこの時代に送り込むことは、しなければなりません』

「それは面倒ね……」

『面倒でも、やらなければなりません。今のあなたになら、それができる』

はですす』

「……」

オムニサイドのコアを破壊する瞬間、コアのきらめきが私の体を包み、私の脳に様々な情報が流れてきた。その情報はまだ整理しきれていないけれど、未知のテクノロジーに関するものも、多く含まれている。

フォルデアを作成し、過去に送る。それらの実現は難しいことだが、今の私には、その理論が頭に浮かんでいた。

「リフィレは、全部、知っていたのね……？」

『はい。私は15年後のあなたから、情報を与えられていました』

「本来の未来の私も、オムニサイドに……」

『捕えられ、凌辱されました。その際にオムニサイドと交信し、当機の作成や時空転送に関する知識を得たのです。今のあなたと同じように。その後奇跡的に脱出したあなたは、15年をかけて、それを実現させました』
『気の遠くなるような話だった。私は15年間も、オムニサイドを破壊するために、準備を進めていたというのか。』

「私が適任って、そういうこと……」

『元の世界において、あなたはオムニサイドに殺されず、標本にされた。この世界においてもそうなるのであれば、コアを破壊するチャンスはあるとの判断です』

「……我ながら、嫌な判断ね」

オムニサイドは文明を破壊するために宇宙から飛来した。その目的を果たすために本来不要であるはずの人類との接触を行ったのは、興味、それと、わずかな寂しさからだった。オムニサイドに触れた私にはそれが分かる。

結果として、その行動により、オムニサイドは自らを破壊することになった。兵器としてはバグのような行動に、人類は救われることとなる。

『……凜子。そろそろお別れのようにです。当機は消滅せずに残りますが、私の人格プログラムは、本来の未来においてあなたによって作り出されたもの。オムニサイドが破壊された今、この人格は、なかったことになりました』

「そう、なのね……あなたがいなかったら、私はオムニサイドを倒せなかった……ありがとう……」

『その言葉だけで、私は救われます。どうか、凜子……15年後……まで、に……この機体、を……』

「……」

リフィレの声が聞こえなくなった。

私の体から、フォルデアが剥がれ落ちていく。私の身を守ってくれていた装甲は、その機能を完全に停止させた。

「救助……いつ来るかなあ……」

私はフォルデアの残骸のなか、ほぼ全裸という状態で、空を見上げた。

（浩介くん……ごめんね……）

彼は無事だろうか。無事でいて欲しい。

だが、この後彼と再開できたとしても、私は今までのように彼と接することはできないだろう。

オムニサイドに見せられた幻の中で、彼に裏切られた光景が、今も鮮明に残っている。現実の彼は私を裏切るような人でないとしても、そのイメージを払拭することはできない。

それに、私の身体はオムニサイドによって、淫らに改造されてしまった。今こうしていても、下腹部が疼いているし、風を受けた肌が敏感に反応している。まともにお付き合いを継続できる状態じゃない。

そして……自らに課せられた使命。15年後の未来から世界を救うため、やらなければならないことがある。

（世界は救われたけど、私は救われないのね……）

私はゆっくりと目を閉じる。

今はただ、眠りたかった。

これくらいの休息は許されるはずだ。

なにしろ時間は、15年もあるのだから。

あとがき

この度は本作品をご購入いただき、誠にありがとうございます。

今回も趣味前回でお送りしています。エロ小説と銘打っているにも関わらず、えっちなシーンが始まるのは全体の1/3を過ぎてからという暴挙っぷりを発揮しております……深く反省している次第です。

今作のタイトルにもなっている、凜子が身に付けた戦闘フレームの名前、フォルデアですが、ラテン語で「幸運」を意味する「フォルトゥナ」と、「女神」を意味する「デア」を組み合わせた造語です。我ながら発想が完全に中二病です。オムニサイドは「全ての」を意味する「オムニ」＋「殺す」を意味する「サイド」の造語。ネーミングがワンパターンです。

ちなみにリフィレは「Rinko fifteen years later (15年後の凜子)」の各単語の頭の発音を繋いだものだったりします。リフィレの人格は、15年後の凜子の人格をコピーしたものだったんですね。あとがきに書かずに作中で語れという話ですが。

挿絵イラストは、青色3号様に描いていただきました。私自身よく分かっていなかったオムニサイドの内部について、見事に具現化していただきました。いくら感謝しても足りません。凜子が空を飛ぶシーンの鮮やかさといったら、ずっと見ても飽きないです。もちろんエロシーンも……ふふふ。涙目の凜子が可愛くて、もう、たまりません。

それでは、また何かの作品が皆様の目に留まることを願って、あとがきとさせていただきます。

2019/7/7 端音 乱希

奥付

発行：2019/7/7

小説：端音 乱希 https://twitter.com/nofuture_hr
<https://www.pixiv.net/member.php?id=8332236>

挿絵：青色3号 https://twitter.com/aoiro_3_
<https://www.pixiv.net/member.php?id=327209>

製作：No Future

連絡先：nofuture.hr@gmail.com

この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

本作品は成人向け作品です。18歳未満の方の購入・閲覧を禁じます。

本作品の全部あるいは一部を転載・配信・送信する行為を禁じます。